

るのであつた。宮は雲井の雁へ手紙を書かれた。

「大臣は私を恨んで居るか知れませんが、あなたは、私が何んなにあなたを愛して居るかを知つて居るでせう。此方へ逢ひに来て下さい。」

宮のお言葉に従つて、美しく著装つて姫君が出て來た。十四である。未だ大人に成り切つては居ないが、子供らしくおとなしい美しさのある人である。

「始終あなたを傍へ置いて見る事が、私の無くてはならぬ慰めでしたが、行つて了つては何んなに寂しいか。私は年寄りだから、あなたの生先おひきが見られないだらうと、命の無くなるのが心細かつたものですがね。私と別れてあなたの行く所は何處かと思ふと可哀相でならない。」

と宮はお泣きになつた。雲井の雁は、祖母の宮のお歎きの原因に自分の戀愛問題がなつて居るのであると思ふと、羞恥の感に堪へられず、顔も上げる事が出來ずに泣いてばかり居た。

若君の乳母の宰相の君が出て來て、

「若様と御一所の御主人様だと唯今まで思つて居りましたのに、残念な事で御座います。殿様

が他の方と御結婚をおさせにならうと遊しても、御従ひ遊ばすな。」

と小言に云ふと、愈々恥しく思つて、雲井の雁は物も言へないのである。

「そんな面倒な話はしない方がよい。縁だけは誰も前生から決められて居るのだから解らない。」

と宮がお云ひになる。

「でも、殿様は貧弱だと思召して若様を輕蔑遊ばすので御座いませうから。まあお姫様見てお出で遊ばせ、私の方の若様が他人に後れをお取りになる方か何うか。」

乳母は口惜しがつて居た。若君は几帳の後へ入つて來て戀人を眺めて居たが、人目を恥ぢる事などは物の切迫しない場合の事で、今はもうそんな事も構はずに泣いて居るのを、乳母は可哀相に思つて、宮へは體裁よく申上げ、夕方の暗に紛れて二人を外の部屋で逢はせた。恥しさに二人は物も云はずに泣き入つた。

「伯父様の態度が恨めしいから、戀しくても私はあなたを忘れて了はうと思ふけれど、逢はな

いで居ては何んなに苦しいかと今から心配でならない。何故逢へば逢ふ事の出来た頃に私は度
度來なかつたらう。」

男の様子には、若々しくてそして心を打つものがあつた。

「私も苦しいでせう、屹度。」

「戀しいだらうとお思ひになる。」

と男が云ふと、雲井の雁が幼い風にうなづく。座敷には灯が點されて、門前からは大臣の前
驅の者が大仰に立てる人拂ひの聲が聞えて來た。女房達がさあさと騒ぎ出すと、雲井の雁は
恐しがつて慄へ出す。男はもう何うでも好いといふ氣になつて、姫君を歸さうとしない。姫君
の乳母が捜しに來て、初めて二人の會合を知つた。何と云ふ厭はしい事であらう、矢張り宮は
お知りにならなかつたのでは無かつたと思ふと、乳母は恨めしくてならなかつた。

「眞實にまあ悲しい。殿様が腹をお立てになつて、何んな事をお云ひ出しになるか知れないば
かりか、大納言宮でもこれをお聞きになつたら何うお思ひになるか。貴公子でおありになつても

最初の殿様が、たか葱の袍の六位の方とは。」

かう云ふ聲も聞えた。二人の居る屏風の直ぐの後に來て乳母は零して居るのである。若君は
自分の位の低いことを言つて侮辱して居るのであると思ふと、急に人生が厭なものに思はれて
來て、戀も少し醒める氣がした。

「そら、あんな事を言つて居る。」

くれなるの涙に深き袖の色を淺緑とや言ひしをるべき
恥しくてならない。」

と云ふと、

いろいろに身のうき程の知らるゝはいかに染めける中の衣ぞ

と雲井の雁が云つたか云はぬかに、もう大臣が家の中に入つて來たので、其まゝ雲井の雁は
立ち上つた。取残された見苦しきも恥しくて、悲しみに胸を塞らせ乍ら、若君は自分の居間へ
入つて、其處で寝ようとして居た。三臺程の車に分乗して姫君の一行は邸を窺つと出て行くら

しい物音を聞くのも、若君には辛く悲しかったから、宮のお居間から来るやうにと、女房を迎へにお遣しになつた時にも、眠つた風をして身じろぎもしなかつた。涙だけが止らずに、一睡もせずに曉になつた。霜の白い頃に若君は急いで出掛けて行つた。泣き腫らした目を見られる事が恥しいのに、宮は屹度傍へ呼ばうとされるであらうから、氣樂な場所へ行つて了ひ度くなつたのである。車の中でも若君はしみじみと破れた戀の悲しみを感じるのであつたが、空模様もひどく曇つて、未だ暗い寂しい夜明けであつた。

霜氷うたて結べる明けぐれの空かきくらし降る涙かな

若君はこんな歌を思つた。

今年源氏は五節の舞姫を一人出すのであつた。大した仕度と云ふものでは無いが、附添ひの童女の衣裳などを、日が近づくので用意させて居た。東の院の花散里夫人は、舞姫の宮中へ入る夜の、附添ひの女房達の装束を引受けて手許で作らせて居た。二條院では全體に互つての一通りの衣裳が作られて居るのである。中宮からも、童女、下仕への女房の幾人かの衣服を華か

に作つて御寄贈になつた。去年は諒闇で五節の無かつた所爲もあつて、誰も近づいて来る五節に心を躍らせて居る年であるから、五人の舞姫を一人づつ引受けて出す所々では豪奢が競はれて居ると云ふ評判であつた。按察大納言の娘、左衛門督の娘などが出る事になつて居た。それから殿上役人の中から一人出す舞姫には、今は近江守で左中將を兼ねて居る良清朝臣の娘になる事になつて居た。今年の舞姫は、其儘續いて女官に採用される事になつて居たから愛嬢を惜まず出すのであると云はれて居た。源氏は自身から出す舞姫に、攝津守兼左京大夫である惟光の娘で美人だと云はれて居るのを選んだ。惟光は迷惑がつて居たが、

「大納言が妾腹の娘を舞姫に出す時に、君の大事な娘を出しても恥では無い。」

と責められて困つた惟光は、女官になれる保證のある點がよいからと諦めて主命に従ふ事にした。舞の稽古などは自宅によく習はせて、舞姫を直接世話する所謂かしづきの幾人かだけは其家で選んだのを附けて初めの日の夕方二條院へ送つた。

猶童女幾人、下仕幾人が附添ひに必要なので、二條院、東の院を通じて勝れた者を多数の中

から選出す事になつた。皆それ相應に選定される名譽を思つて集つて來た。陛下が五節の童女だけを御覽になる日の練習に、縁側を歩かせて見て決めようと源氏はした。落選させてよい様な子は無く皆それ〴〵の特色のある美しい顔なのに、源氏は却つて困つた。

「もう一人分の附添ひの童女も私の方から出さうか。」

などと笑つた。結局品のよい落付きのある者が採られる事になつた。

大學生の若君は失戀の悲しみに胸が閉ぢられて、何にも興味が持てない程氣が減入つて、書物も讀む氣のしない程の氣分が幾分慰められるかも知れぬと、五節の夜は二條院に行つて居た。落着いた艶な姿の少年であつたから、若い女房などから憧憬を持たれて居た。夫人の居る方では御簾の前へも餘り坐らせぬ様に源氏は扱つた。源氏自身の經驗に由つて危険がるのか、さう云ふ風で女房達さへも若君と親しくする者は居なかつた。併し今日は混雜に紛れて室内へも入つて行つたものらしい。車で著いた舞姫を下して、妻戸の所の座敷に屏風などで圍ひをした舞姫の假りの休息室へ入れてあつたのを、若君は切つと屏風の後から覗いて見た。舞姫は苦し相

にして身體を横向に長くして居た。丁度雲井の雁と同じ年頃であつた。それより背が少し高く、全體の姿に鮮かな美しさのある點は勝るやうにさへ見えた。暗いのでよくは見えないが、年頃が同じ位で戀人の思はれる點が嬉しくて、戀が移つた譯でも無いがこれにも關心は持たれた。若君は衣服の棲先を引いて音をさせた。思ひがけぬ事で怪しがる顔を見て、

天にます豊岡姫の宮人もわが志すしめを忘るな

「みづかきの（久しき世より思ひ初めてき）」

と云つた。若々しい美しい聲の主が誰であるか舞姫は考へる事も出来ない。氣味悪く思つて居る時顔の化粧を直しに騒しく世話役の女が幾人も來た。若君は残念に思ひ乍ら其部屋を立去つた。淺葱の袍を着て行く事が厭で、若君は御所へ行きもしなかつたが、五節を機會に好みの色の直衣を着て宮中へ出入する事を許されたので、其夜から御所へも行つた。未だ小柄な美少年は、若公達らしく御所の中を遊び廻つて居た。帝を始め此人をお愛しになる方が多く、他に類の無いやうな御恩寵を若君は身に負つて居た。

五節の舞姫が揃つて御所へ入る儀式には、何の舞姫も盛装を凝して居たが、美しい點では源氏のと、大納言の舞姫が勝れて居ると若い役人達は賞めた。實際二人とも綺麗であつたが、ゆつたりした美しさは矢張源氏の舞姫が勝れて居るやうであつた。綺麗で現代的で五節の舞姫などと云ふものゝやうで無い装りにした感じの良さが、かう賞められる理由であつた。例年の舞姫よりも少し大きくて、期待に背かぬ舞姫達であつた。源氏も参内して陪觀したが、五節の舞姫の少女が目に留つた昔を思ひ出した。辰の日の夕方、大貳の五節へ源氏は手紙を書いた。

少女子も神さびぬらし天つ袖ふるき世の友よはひ經ぬれば

五節は、今日までの年月の長さを思つて、物哀れになつた心持を源氏が昔の自分に書いて告げただけである、これだけの事を喜びにしなければならぬ自分かと果敢んだ。

かけて云はゞ今日の事とぞ思ほゆる日かげの霜の袖にとけしも

新嘗祭の小忌の音摺りを模様にした、此場合に相應しい紙に、濃淡の混ぜやうを面白く見せた漢字勝ちの返事の手紙も、其階級の女に相應はしく感じがよかつた。

若君も特に目立つ美しい自家の五節を舞の庭に見て、逢つて物を云ふ機會を作り度く樂屋の邊りへ行つても見たが、近くへ人も寄せぬやうな警戒振りであつたから、羞恥心の多い年頃の此人は歎息するばかりで、其れ切りにして了つた。恨めしい人に逢へない心の慰めにはあの人を戀人に得たいと思つて居た。

五節の舞姫は皆留つて宮中の奉仕をするやうにと仰せがあつたが、一旦は皆退出させて近江守のは唐崎、攝津守の子は浪速で被ひをさせ度いと願つて自宅へ歸つた。大納言も別の形式で宮仕へに差上げる事を奏上した。左衛門督は娘でない者を娘として五節に出した事で問題になつたが、それも女官に採用される事になつた。惟光は典侍の職が一つ空いて居る補充に娘を採用され度いと申出た。源氏も其希望通りにしてやつてもよいと思つて居る事を若君は聞いて、残念に思つた。自分がこんな少年でも無く、六位級でも無ければ、女官などにせず、父の大臣に乞うて同棲を默認して貰ふのに、現在は不可能な事である、戀しく思ふ心だけでも知らせずに終るのかと、大したもの思ひでは無かつたが、雲井の雁を思つて流す涙と一所に、その方の涙

の零れる事もあつた。五節の弟で、若君にも丁寧な臣禮を取つて来る惟光の子に或日逢つた若君は、平生よりも親しく話してやつた後で云つた。

「五節は何時御所へ入るの。」

「今年の中だと云ふ事です。」

「君は姉さんだから毎日見られるだらうから羨しい。」

「そんな事はありません。男の兄弟でも餘り傍へ寄せて呉れませんもの。」

と、姉の顔を若君に見せる事は駄目だと云はれ、せめて手紙でも持つて行つて呉れるやうにと、手紙を渡した。惟光の子は是れ迄もこんな役をしては何時も家庭で叱られるので迷惑にも思つたが、若君が氣の毒にも思はれて持歸つた。五節は年よりもませて居たのか、若君の手紙を嬉しく思つた。緑色の薄様の美しい重紙に、字は未だ子供らしいが、よい將來を思はせる字で書かれてある。

日かげにもしるかりけめや少女子が天の羽袖にかけし心は

姉と弟が此手紙を一所に読んで居る所へ、思ひがけなくも父の惟光が來た。隠して了ふ事も亦恐ろしくて出來ぬ若い姉弟であつた。誰の手紙かと父が手に取るのを見て赤くなつた。

「よくない使をしたね。」

と叱られて逃げて行かうとする子を惟光は呼んだ。

「誰から頼まれた。」

「殿様の若君が是非にと仰つしやるので。」

今迄怒つて居た人のやうでも無く、惟光は笑顔になつた。

「何といふ可愛い悪戯だらう。お前などは同年でも未だ全くの子供では無いか。」

と賞めて、妻にも其手紙を見せた。

「かうした貴公子に愛して貰へれば、たゞの女官のお勤めをさせるより私は其方へ上げて了ひ度い位だ。殿様の御性格を見ると戀愛關係をお作りになつた以上、御自身の方から相手をお捨てになる事は絶対に無い様だ。私も明石の入道になるかな。」

若君は雲井の雁へ手紙を送る事すら出来なかつた。二つの戀をして居るが、一つの重い方の事のみが心に懸つて、時が経てば経つ程戀しくなり、目の前を去らない面影の主に今一度會ふ事も出来ぬかと嘆かれるのである。祖母の宮のお邸へ行く事も理由も無く悲しくて、餘り出掛けもしなかつた。其人の住んで居た座敷、幼い時から一所に遊んだ部屋などを見ては、胸苦しさか募るばかりで、家其ものも恨めしくなつて、勉強所にはかり引籠つて居た。源氏は同じ東の院の花散里夫人に、母としての若君の世話を頼んだ。

「大宮はお年がお年だから何時何うおなりになるか知れない。お薨れになつた後の事を思ふとかうして少年の時から馴らして置いてあなたの厄介になるのが最もよいと思ふ。」

柔順な夫人は、源氏の言葉に絶対の服従をする習慣から、若君を愛して優しく世話をした。若君は養母の夫人の顔を仄かに見る事もあつた。佳くないお顔である、こんな人を父は妻として居られるのか、自分が恨めしい人の顔に執着を断てないのも自分の心が出来上つて居ないからであらう、かうした優しい性質の婦人と夫婦になり得たら幸福であらうと、こんな事を若君

は思つたが、併し餘りに美しく無い顔の妻は向ひ合つた時に氣の毒になつて了はう、こんなに長い關係になつて居乍ら、容貌の醜なる點性質の美な點を認めた父君は、夫婦生活などは疎にして妻としての待遇に出来る限りの好意を盡して居られるらしい、それが合理的なやうであるとも若君は思つた。そんな事までも觀察して居たのである。大宮は尼姿になつて居られるが未だ美しかつたし、其他何處で此人が見るのも相當な容貌が集められて居る女房達であつたから女の顔といふものは皆美しいものと思つて居たのである。若い時から美しい人で無かつた花散里の、女盛りも過ぎて衰へた顔は、瘦せた貧弱なものになつたのを見て、こんな風に思ふのであつた。

年末には、正月の衣裳を大宮は若君の爲めにばかり仕度された。幾重ねも美しい春の衣服の出来上つて居るのを、若君は見るのも厭な氣がして居た。

「元日だつて私は必ずしも参内するもので無いのに、何の爲めにこんなに用意をなさるのですか。」

「そんな事がありますか。癡人の年寄りのやうな事を云ふ。」

「年寄りではありませんが、癡人の無力が自分には感じられます。」

若君は獨言を云つて涙ぐんで居た。失戀を悲しむのかと哀れに御覽になつて、宮も寂しい顔を遊ばされた。

「男性といふものは、何んな低い身分の人でも、心持だけは高く持つものです。餘り減入つたさうした風は見せない様になさいよ。あなたがそんなに思込む程の價値のあるものは無いではないか。」

「それは別に無いのですが、六位だと人が輕蔑をしますから、それは暫くの間的事だとは知つて居ますが、御所へ行くのも氣が進みません。お祖父様がおいでになつたら、戲談にも人は私を輕蔑しますまい。眞實のお父様ですが、私をお扱ひになるのは形式的に重くして居られるとしか思はれません。東の院でだけ私はあの方の子らしくして頂けます。西の對のお母様だけは優しくして下さいます。もう一人私に眞實のお母様があれば、私はそれだけでもう幸福なので

せうが。お祖母様。」

涙の流れるのを紛らして居る様子の可哀相なのを御覽になつて、宮ははらはらと涙を零して泣かれた。

「母を亡くした子といふものは、何の階級を通じても皆さうした心細い思ひをして居るのだけれど、誰にも自身の運命と云ふものがあつて、出世して下へば、もう輕蔑する人などは無いのだからね。お祖父様がもう暫く生きて居て下さつたらね。お父様がおいでなのだから、お祖父様位りの愛はあなたに掛けて頂けると信じて居ますが、思ふやうには行かないものですね。内大臣も立派な人格者の様に世間で云つて居ても、私に昔の様な平和も幸福も無くなつて行くのは何ういふ譯だらう。私は唯長生の罪にして諦めますが、あなたのやうな人を少しでも厭世的にする世の中かと思ふと恨めしくなります。」

と宮は泣いて居られた。

元日は源氏も外出の要が無かつたから長閑であつた。良房の大臣の賜つた古例で、七日の白

馬が二條院へ引かれて來た。宮中通りに行はれた莊重な式であつた。

二月の二十幾日は朱雀院へ行幸があつた。櫻の盛りには未だなつて居なかつたが、三月は母後の御忌月であつたから、此月が選ばれた。早咲きの櫻は咲いて居て春の眺めはもう美しかつた。お迎へになる院の方でも種々の御準備があつた。行幸の供奉をする顯官も親王方も其日の服装などに苦心して居た。其人達は皆青色の下に櫻襲ねを用ひた。帝は赤の御服であつた。お召しに源氏の大臣が参院した。同じ赤色を着て居たので、帝と同じに見えて、源氏の美貌が輝いた。院も益々清艶な姿におなり遊ばされた。今日は専門の詩人はお招きにならず、詩才の認められた大學生を十人召された。これを式部省の試験に代へて作詩の題を其人達は頂いた。これは源氏の長男のために態とお計ひになつた事である。氣の弱い學生などは頭を茫うとさせて居て、お庭先の池に放たれた船に乗つて水上で制作に苦しんで居た。夕方近くなつて、音楽者を載せた船が池を往來して、樂音を山風に混せて吹き立て、居る時、若君は、こんなに苦しい道を進まないでも自分の才分を發揮させる道はあらうにと恨めしく思つた。「春鶯轉」が舞はれ

て居る時、昔の櫻花の宴の日の事を院の帝はお思ひ出しになつて、もうあゝいふ面白い事は見られまいと思ふと源氏へ仰せられた。源氏は其御言葉から青春時代の戀愛三昧を偲んで物哀れな氣分になつた。源氏は院へ杯を參らせて歌つた。

鶯のさへづる春は昔にて睦れし花のかけぞ變れる。

院は、

九重を霞へだつる住處にも春と告げくる鶯の聲

と答へられた。大宰帥の宮と云はれた方は兵部卿になつて居られたが、陛下へ杯を獻じた。

いにしへを吹き傳へたる笛竹にさへづる鳥の音さへ變らぬ

此歌を奏上したその御様子が殊に立派であつた。帝は杯をお取りになつて、

鶯の昔を戀ひて轉づるは木づたふ花の色やあせたる

と仰せになるのが重々しく氣高かつた。

奏樂所が遠くて、細い樂音が聞分けられないので、樂器が御前へ召された。兵部卿の宮が程

琵琶、内大臣は和琴、十三絃が院の帝の御前に差上げられて、琴は例の様に源氏の役になった。歌ふ役を勤める殿上役人が選ばれてあつて、「安名尊」が最初に歌はれ、次に「櫻人」が出た。月が朧ろに出た美しい夜の庭に、中島邊りでは其處彼處に篝火が焚かれてあつた。

夜更けになつたのであるが、此機會に皇太后を御訪問遊ばさないのも冷淡な事と思召して、お歸りがけに帝は其方の御殿へお廻りになつた。源氏もお供をした。太后は非常に喜んでお迎へになつた。もう非常に老いて居られるのを帝は御覽になつても、御母宮をお思出しになつて、こんな長生をされる方もあるのにと残念に思召された。

「私などは總ての過去を忘れて了つて居りますのに、勿體ない御訪問を頂きました事から、昔の御代が偲ばれます。」

と太后は泣いておいでになつた。

「御兩親が早くお崩れになりまして以來、春を春でもない様に寂しく見て居りましたが、今日は始めて十分に享樂致しました。又伺ひませう。」

と陛下は仰せられ、源氏も御挨拶をした。還幸の鳳輦を華かに百官の圍繞して行く光景が、物の響に想像される時にも、太后は過去の御自身の態度の非を悔いられた。源氏は何う自分の昔を思つて居るであらうと恥ぢておいでになつた。一國を支配する人の持つて居る運は、何んな咀ひよりも強いものであるとお悟りにもなつたのである。

朧月夜の尙侍も靜かな院の中に居て、過去を思ふ時、源氏との戀愛の昔が今も身に沁む事に思はれた。近頃でも源氏は好便に托しては文通をして居た。太后は政治に御注文をお持ちになる時とか、御自身の推薦權の與へられて居る限られた官爵の運用に就てとかに思召しの通らない時は、長生をして情ない末世に苦しむと云ふやうな事をお言出しになり、御無理も仰せられた。年を取られるに従つて強い御氣質が益々強くなつて院もお困りになる風であつた。

源氏の公子は其日の成績がよくて進士になられた。碩學の人達が選ばれて審査に當つたのであるが、及第は三人しか無かつた。そして若君は秋の叙目の時に侍從に任ぜられた。雲井の雁を忘れる時は無いのであるが、大臣が嚴重に監視して居るのも恨めしく、無理をして逢つて見よ

うともしなかつた。手紙だけは便宜を作つて送ると云ふ様な苦しい戀を二人はして居るのであつた。

源氏は靜かな生活の出来る家を成可く廣く作つて、別れ別れに居る、譬へば嵯峨の山莊の人なども一所に住ませ度いと云ふ希望を持つて、六條の京極の邊に中宮の舊邸のあつた所に四町四面を地域として新邸を造營させて居た。式部卿の宮は來年は五十になられるので、紫夫人は其賀宴をし度いと思つて仕度をして居るのを見て、源氏もそれは是非ともしなればならぬし成可くは新邸でし度いと、其爲めにも建築を急がせて居た。春になつてからは、源氏が専ら宮の五十の御賀の用意をして居た。落し忌の饗宴の事、其際の樂人、舞人の選定などは、源氏の引受けて居る事で、附帶して行はれる佛事の日の經卷や佛像の製作、法事の僧へ出す布施の衣服、一般の人への纏頭の品々は夫人が力を傾けて用意して居る事であつた。東の院でも仕事を分擔して助けて居た。

花散里夫人も紫の女王とは互に同情を持つて美しい交際をして居た。世間までがその爲めに

騒ぐやうに見える大仕掛けな賀宴の事を式部卿の宮もお聞きになつた。是れまでは、誰の爲めにも慈父の様な廣い心を持つ源氏であるが、宮御自身と御自身の周圍の者に丈けは冷酷な態度を續けて居たのも、源氏の立場になつて見れば恨めしい事が過去にあつたのであらうと、其の時代の源氏夫婦が今更氣の毒にも思はれて、かうした現状を苦しがつておいでになつたが、女王が、源氏の幾人もある妻妾の中の最愛の夫人であつて、世間から敬意を寄せられて居る事も並々で無い人が娘である事は、其幸福が自家へ分けられぬ物にもせよ、自家の名譽とは思つて居られた。それに此度の賀宴が、源氏の勢力の下で曾てない善美を盡した準備が備へられて居る事をお知りになつたのであるから、思ひがけぬ老後の光榮を受けると感激して居られた。併し宮の夫人は不快に思つて居た。女御の後宮の競争にも源氏が同情的態度に出ない事で、愈々恨めしがつて居るのであつた。

八月、六條院の造營が終つて二條院から源氏は移る事になつた。南西は中宮の舊邸のあつた所で其處は宮のお住居になる筈である。南の東は源氏の住む所である。北東の一帶は東の院の

花散里、西北は明石夫人と決めて作られてあつた。もとからあつた池や築山も都合の悪いのは崩して、水の委山の趣も改められた。南東は山が高く、春の花の木が無數に植ゑられてあつた。池が殊に自然に出来て居て、近い植込の所には、五葉、紅梅、櫻、藤、山吹、岩躑躅などを主にして、其中には秋の草木が混せてあつた。中宮のお住居の所は、もとの築山に美しく染まる紅葉を加へられ、流れが澄んだ音を立てるやうに石が水中に添へられた。瀧を落して奥には秋の草野が續けられてある。丁度其季節であつたから、嵯峨の大井の野が此爲めに輕蔑されて了ひ相である。北の東は涼しい泉があつて、此處は夏の庭になつて居た。座敷の前には吳竹が多く、下風の涼しさが思はれた。森の様な大木が深く奥にはあつて、田舎らしい卯の花の垣などが作られた。昔の思はれる花橋、撫子、薔薇、苦丹などの中に春秋のものも配してあつた。東を向いた所は特に馬場殿になつて居た。庭には埒が結はれて、五月の遊び場所が出来て居るのである。菖蒲が茂らせてあつて、向ひの厩には名馬ばかりが飼はれて居た。北西は北側にずつと倉が並んで居るが、隔ての垣には唐竹が植ゑられて、松の木の多いのは雪を樂しむ爲

めである。冬の初めに初霜の降りる菊の垣根、朗かな柞原、その外には餘り名の知れて居ないやうな山の木の枝のよく繁つたものなどが移された。

秋の彼岸頃に、源氏の一家は六條院へ移つて行つた。一度にと思つたのであるが、仰山らしくなるのを避けて、中宮のお入りになるのはお延ばしになつた。おとなしい花散里夫人は同じ日に東の院から移轉させた。春の庭は、今の季節では無いやうなもの、矢張り全體として最勝れて見えた。車の數は十五で、前驅には四位五位が多かつたが大層らしくなる事は源氏が避けてしなかつた。もう一人の主人の前驅なども餘り落さなかつた。長男の侍従が其夫人の子になつて居るのであるから道理に見えた。女房達の部屋の配置や細々と分けた點なども優れて設計されて居た。

五六日して、中宮が御所から退出してお出でになつた。其儀式は流石に派手であつた。源氏を後援者にしておいでになる方といふ幸福の外にも、其お優しさと高潔さが衆望を得て居る素晴らしいお后であつた。此四つに分れた住居は、塀で仕切つたり、廊で續いた所もあつて大き

な美観を成して居た。九月にはもう紅葉がむらむらに色付いて、中宮の前のお庭が非常に美しくなつた。夕方風の吹出した日、中宮は種々の秋の花紅葉を箱の蓋に入れて紫夫人へ贈られた。やゝ大柄な童女が深紅の袖かきまを著、紫苑色の厚織物の服を下に着けて、赤朽葉色の汗衫あせうすを上にした姿で、廊の縁側を通り渡殿の石橋を越えて持つて來た。お后が童女をお使ひになるのは正式な場合には遊ばさない事であるが、彼等の可憐な姿が他の使に勝ると宮は思召したのである。

心から春待つ園は我が宿の紅葉を風のつへにだに見よ

と云ふ御手紙であつた。此方からは其の箱の蓋へ、下に苔を敷き岩を据ゑたのをお返しにした。紅葉の枝に付けたのは、

風に散る紅葉は輕し春の色を岩根の松にかけてこそ見め

と云ふ夫人の歌であつた。よく見れば此岩は作り物であつた。直ぐにかうした趣向の出來る夫人の才に源氏は敬服した。女房達も皆面白がつて居た。

「紅葉の贈物は秋の御自慢なのだから、春の花盛りに此に對する事は云つてお上げなさい。此

頃紅葉を悪く言ふのは立田姫に遠慮す可きです。別な時に櫻の花を背景として物を言へば強い事も云はれるでせう。」

こんな風に何時までも若い心の衰へない源氏夫婦が同じ六條院の人として中宮と風流な戯れをし合つて居た。

大井の夫人は一番あとで十月に六條院へ來た。住居の設備も、移る日の儀装も他の夫人に劣らなかつた。それは姫君の將來を考へて居るからで、迎へてからも重々しく扱つて居た。

玉

鬢

年月が何んなに経つても源氏は死んだ夕顔の事は少しも忘れなかつた。

右近は平凡な女であつたが、源氏は夕顔の形身として庇護して居たので、今では古い女房の一人として紫夫人の侍女になつて居た。そして心の中では、夕顔夫人は紫夫人の列には入れなくとも六條院へ移られた夫人の中にはおいでになる筈だと、何時も悲んで居た。西の京へ別居させてあつた姫君が何うなつたかも右近は知らずに居た。夕顔の死を告げられぬ心弱さと、今になつて相手が自分であつた事は知らせぬ様にと源氏から言はれたので、右近の方から尋ね出す事が無かつた中に、乳母の良人が九州の少貳に任せられて一家は九州へ下つた。姫君が四歳の時であつた。乳母達は母君の行方を知らうとしたが、その甲斐も無かつた。姫君だけでも夫人の形見に育てたい、卑しい自分達と一緒に遠國へ伴ふのを悲しんで居ると父君へ仄めかし度いと思つたが、良いつても無かつた。母君の所在も知らないでは、問はれた時に返辭のしやうも無い、父君へお渡して行くのも氣懸りであるしなどと云ひ出す者もあつて、美しく、既に高貴の相を備へた姫君をも旅の役人の船に載せて立つた。

「お母様の所へ行くの。」

と幼い姫君が母君を忘れずに折々尋ねるのも悲しかつた。美しい名所でも、こんな景色をお見せしたい、併し奥様さへお出でになつたら自分達も旅には出て居ない譯だと、京ばかり思はれる此人達には、歸つて行く波も羨しかつた。荒々しい船夫達の唄を聞いて姉妹は向ひ合つて泣いた。

船人も誰を戀ふるや大島のうら悲しくも聲の聞ゆる

來し方も行方も知らぬ沖に出でてあはれ何處に君を戀ふらん

こんな歌をも作つた。小貳一家は姫君をかしづき立てる事だけを幸福に思つて任地で暮して居た。夢を見て、もう夕顔の君は死んで了はれたのかと思ふやうな事もあつた。

任期の満ちた時も小貳は上京せずに居た。其の中に重い病氣になつた。小貳は死ぬ間際にも、もう十歳位になつた美しい姫君を見て、

「いづれ京へお供して、御肉身の方々へお知らせ申してと思つて居りましたのに。」

と歎き、三人の男の子には、

「何よりも先にしなければならぬのは姫君のお供をして京へ出る事だ。私の爲めの佛事などはするに及ばん。」

と遺言をした。父君の誰であるかも家の者にも明かさず唯大切にする譯のある孫であると言つてあつたので、家族も上京を急ぐのではあつたが、此國には小貳に反感を持つ者が多く、此際報復を受けるのが恐ろしくて、上京も見合せて居る中に、年月はどんどん経つて行つた。妙齡になつた姫君は、母の夕顔よりも美しかつた。父親の方の筋によるのか、氣高い美が此人にはあつた。好色な地方官などが結婚を申込んだりして來たが、不具な所が身體にある孫であるから尼にして手許に置くと乳母は言つて居た。

「惜しいものだ、少貳の孫は片輪だ相だ。」

こんな事を人の言ふのを聞くと乳母は又濟まない氣がして、何んなにしても京へお伴れしようと思ひもし、神佛にも其實現の願をかけるのであつたが、娘達や息子達も土地の者と縁組み

をして土著せねばならぬ様になつて行つた。

大人になつた姫君は、自分の運命を悲しく思ひ、一年に三度の長精進などして居た。二十歳ぐらゐになると眩い程美しい人になつた。此の肥前の國の邊りの豪族などは今でも絶えず結婚を申込んで來た。

大夫の監と云つて肥後の國に聞えた豪族があつて、強力な武力を持つて居た。そんな田舎武士の心にも好色的な風流氣があつて、美人を多く妻妾にしたい望みがあつた。少貳家の姫君の事をも聞いた大夫の監は、何んな不具な所があらうとも妻にし度いと申出でて來た。一旦斷ると、大夫の監は自身で肥前へ出て來た。そして少貳家の息子達を旅宿へ呼んで縁組に助力を求めるのであつた。結婚が成立つた曉には兩家は力になり合つて、少貳家へ武力の後援も惜まぬと言ふので、二人の息子だけは、

「考へて見ると自分達の後立てには最も都合のいゝ有力な男だ。貴族の姫君だと云つても父君も打ちやつて置かれたし、世間も知らない事でもあるし、仕方ありますまい。これも姫君の運

命なのでせう。断つたら何んな無茶を監はするかも知れません。」

と家族を感した。長兄の豊後介だけは、勿體ない、自分は何うしても此際姫君を京へお伴れしようと思つた。女達も皆泣いて心配して居た。監は手紙を送つて來たりした。字なども一寸綺麗で、唐紙に香の薫りを沁ませたのに書いて來る手紙も、文章は物になつて居なかつた。又少貳家の次男と伴れ立つて自身で訪ねて來た。年は三十位で、背が高く物々しく肥つて居て荒々しい様子は恐ろしい氣がした。血色が好くて快活ではあるが枯れた聲で語り散らす。求婚者は夜に訪問するものであるのに、これは風變りな春の夕方の事であつた。機嫌を損ねまいとして未亡人のおとゝが、出て應接した。此縁組みに賛成して呉れないのは、自分がこれまで幾人ものつまらぬ女と關係して來たからでは無いのか、例へ自分にそんな女達が附いてゐるとしても、其等と姫君とは一緒の扱ひなどはしないと、監は勝手な事を云つた。

「何んな盲目でもゐざりでも私は護つて行つて上げます。自分が人並の身體に直して上げますよ。」

とも誇つて居た。結婚の日取りなども何日と云ふので、おとゝは、今月は春の終りで結婚には宜く無いと云ふ様な田舎めいた口實で断つた。縁側から下りて行く時、監は歌を詠んで見せた。

君にもし心たがはゞ松浦なるかゞみの神をかけて誓はん

おとゝは返歌などをする氣にはなれなかつたが、興味の無い歌を辛うじて出まかせに言つた。

年を経て祈る心のたがひなばかゞみの神をつらしとや見ん

先刻からの氣味の悪さにおとゝは慄へ聲になつて居た。お待ちなさい、其お返事の内容だが、と監がのつそりと寄つて來て腑に落ちぬと云ふ顔をするので、おとゝは眞青になつて了つた。娘達が、代つてこじつけて、

「此縁談が成立した時お嬢様が恨めしく思ひはせぬかと案じて、呆けた母ですから變な歌を詠んだだけです。」

と云つた。技巧が達者なものですね、などと監は點頭いて其儘歸つて行つた。次郎がすつか

り彼方の味方になつて居るのを家族は憎み乍らも、豊後介の助けを求めぬ事が急であつた。何うして姫君にお盡しすればよいか、監ザンの敵になつては此の地方では何一つ仕事は出来まいと、豊後介は煩悶をして居た。姫君が口には出さずに悲しんで居る様子を見ると氣の毒で、さうなれば死なうと決心して居る様子が道理に思はれて、豊後は苦しい策をして姫君の上京を助ける事にした。妹達も馴染んだ良人を捨て、姫君に従いて行く事になつた。あてきと云つて、夕顔夫人が使つて居た童女は兵部の君と云ふ女房になつて居て、此女達が附添つて夜家を出て船に乗つた。大夫の監ザンは一旦肥後へ歸つて四月の二十日頃に吉日を選んで新婦を迎へに來ようとして居る中に、かうして肥前を脱出するのである。姉は子供も大勢になつて居て同行出来なかつた。行く人にとつては見捨て難い程心の残るものは何も此土地に無かつた。唯松浦の宮の前の海岸の風光と、姉嬢と別れるのが辛いだけであつた。

行くさきも見えぬ波路に船出して風に任する身こそ浮きたれ

姫君はかう歌つた。心細くて姫君は船でうつ伏しになつて居た。負け嫌ひな監ザンがそれと知つ

て追つて來るかと思はれるのが恐ろしかつた。此船は早船と云つて普通の船よりも船脚は早く、丁度追風でもあつて危い位早く京を指して走つた。響の灘も無事に過ぎた。

小さい船が飛ぶやうに走つて來る、海賊の船が知らんなどと云ふ者もあると、少貳の遺族は監の追手かと胸を冷やした。川尻に近づいた時船中の者は初めてほつとした。「唐泊より川尻おすほどは」と船子は唄つて居た。荒々しい彼等の聲も身に沁みた。豊後は、自分は妻子を捨てて來た、あとは監ザンの復讐は無いであらうかと、氣が弱く、泣いた。「胡地妻子虚棄損」と彼れが歌つて居るのを聞いて兵部も悲んだ。別れて來た男を偲んだのである。京と云つても頼つて行く程の知人も無し、姫君を何うするつもりかと豊後介も自分で自分を呆れて居たが、今更仕方も無く其儘一行は京へ入り、昔知つて居た人を九條に捜して、其處を足留りにした。秋になると一層物事が身に沁みた。頼りとする豊後介も、水鳥が陸へ上つたやうなもので、職を求めぬ手蔓も知らなかつた。伴れて來た郎黨も何かの口實を作つて一人去り二人去りして九州へ歸る者ばかりであつた。

「九州の松浦、箱崎と同じ神ですから、彼方をお立ちになる時、お立てになつた願もありますし。」

と、豊後は姫君に近くの八幡へお詣りをさせた。豊後は又長谷詣でを姫君に勧めた。徒歩で行く曾て知らない長い旅路は、姫君には苦しかつたが、辛さを忍んで夢中に歩いて行つた。自分は前生に何んな重い罪障があつて此苦しみに堪へねばならぬのか、母君がお亡くなりであつたら、其國へ自分をも伴れて行つて貰ひ度い、未だ生きて居られるならお會ひ出来るやうにして頂き度いと、姫君は観音を念じて居た。姫君は母の顔を覚えて居なかつた。たゞかうした苦難に身を置いては、一層親が戀しかつた。

京を出て四日目の晝前に漸く椿市といふ所へ、生きて居る氣もしないで著いた。もう足の裏が腫れて動かせなかつた。豊後介と弓矢を持つた郎黨が二人、僕と子供侍が三四人、姫君の附添ひの女房は全部で三人、これは髪の上から上着を着た壺装束をして居た。それから下女が二人で派手な長谷詣りの一行ではなかつた。寺へ燈明料を納めたりする事を此處で頼んだりして

居る中に日暮時になつた。休んでゐる此家の主人の僧が向ふで言つて居る。

「私には今夜泊めようと思つて居る客があつたのに誰が勝手に泊めて了つたのだ。相談無しに物知らずの女共め。」

怒つて居るのである。九州の一行は残念な氣持ちでこれを聞いて居た。僧の言つた通り参詣者の一團が町へ入つて來た。矢張り徒歩で來たものらしい。主人らしいのは二人の女で、召使の数は多かつた。馬も四五頭引かせて居た。目立たぬやうにして居るが綺麗な顔をした侍なども従つて居た。先客があつても何うかして此連中をも泊めようと、主人の僧は道に出て頭を掻き乍ら追従をして居た。可哀相にも思つたが宿を變へるのも面倒なので、或人々は奥へ入り残りの者も又見えない部屋の方へ遣つて、姫君と女房達だけ、もとの部屋の隅へ寄つて、幕の様なので仕切りをして濟ませて居た。後の客も遠慮深く靜かで、慎ましい合客であつた。此の後から來た女は、姫君を片時も忘れずに戀しがつて居た右近であつた。何時までも續けてゐる女房勤めも氣がさす様に思はれ、煩悶のある心の慰めに此寺へ屢々詣つて居たのである。右近は流

石に草臥れて横になつて居た。

豊後介は幕の所へ来て、食事なのであらう、自身で折敷を持つて云つて居た。

「これを姫君に差上げて下さい。膳や食器も寄せ集めで、全く失禮なのです。」

右近は此れを聞いて居て、隣に居る人は自分等の階級の人では無いらしいと思つた。幕の所へ寄つて覗いて見たが、其男の顔に見覚えがある氣がした。豊後介の極く若い時を知つて居る右近は、肥えて色も黒くなつて居るのを今見ても、直ぐには思出せなかつた。

「三條、お召しですよ。」

と呼ばれて出て来る女を見ると、それも昔見た人であつた。昔の夕顔夫人に、下の女房ではあつたが長く使はれて居て、五條の隠れ屋にまでも来て居た女である事が解つた右近は、夢のやうな氣がした。主人である人の顔を見度くても、覗いて見られなかつた。思案の末に、右近は、三條に聞いて見よう、兵藤太と昔云はれた人も此男であらう、姫君が此處に居られるのであらうかと思ふと、氣が急いで、又不安でならないのであつた。幕の所から三條を呼ばせたが

熱心に食事をして居る女は直ぐには出て來なかつたが漸く出て來た。

「何うも解りません。九州に二十年も行つて居りました卑しい私共を知つておいでになると仰つしやる京の御方様、お人違ひではありませんか。」

と、田舎風に眞赤な搔練かいたねを下に着て、これも身體は肥つて居た。其れを見ても自身の年が思はれて右近は恥しかつた。

「もつと近くへ寄つて私を御覽。私の顔に見覚えがありますか。」

三條は手を打つて云つた。

「まあ。あなたでいらつしやいましたね。何方からお詣りになりました。奥様はいらつしやいますか。」

三條は大聲を上げて泣き出した。昔は若い三條であつたのにと、右近の心は哀れになつた。「おとゞさんはいらつしやいますか。姫君は何うおなりになりました。あてきと云つた人は？」と右近は疊みかけて聞いた。夫人の事は失望させるのが辛くて未だ口に出せなかつた。

三條から聞いた、九州から来た人達の驚きは勿論であつた。夢のやうな気がすると云つておとゞは幕の所へ来た。もう隔ての屏風は取拂つて了つた。右近もおとゞも最初は物も云へずに泣き合つた。

「お話しても甲斐の無い事で御座いますよ。奥様はもう早くお亡くなりになつたのです。」

と右近は云つた。三條とも三人は咽せ返つて泣いて居た。日が暮れてお籠りをする人々の燈明が上げられたと宿の者が云つて、寺へ早く出掛ける事を急がした。一所に参詣をと云つたのであつたが、双方とも供の者の不思議に思ふ事を避けて、おとゞの方では未だ豊後介にも事實を話す間も無いまゝで同時に宿坊を出た。右近は人知れず、九州の一行の中の姫君の姿を探つて居たが、美しい後姿をした一人の、ひどく疲れたらしく、夏の初めの薄絹の單衣の様なものを上から着て、隠れた髪の見事な人を見つけた。氣の毒にも悲しい事にも思つて眺めたのであつた。九州の一行は姫君を介抱し乍ら坂を上るので、初夜の勤めの始る頃に漸く御堂へ著いた。御堂は非常に混雑して居た。

右近の取らせてあつた部屋は右側で佛前に近く、九州の人の西の方の間で佛前に遠かつた。此方へと右近が召使を遣したので、男達を其處に残して、おとゞは右近との邂逅を簡単に豊後介へ語つてから、右近の部屋の方へ姫君を移した。右近は委しい話をし度いのであるが、經聲の大きいのに妨げられて、已むを得ず佛を拜んで居た。

「この方にお逢はせ下さる様にお願ひ致した事もおかなへ下さいましたから、今度はこの方を源氏がお子様にしてお世話し度いと熱心に思召すのが實行されますやうにお計ひ下さい。」

と祈つて居た。國々の参詣者が多かつた。大和守の妻も來た。其派手な参詣振りを羨んで、姫君が大貳の夫人にはなれなくとも、此大和の長官の夫人にして頂き度いと三條は佛に祈つて居た。右近は苦々しく思つて、

「天下の政治を遊ばす今の大臣の姫君をそんな低いものにして。」

と云つた。九州の人達は三日参籠する事にして居た。右近は其れ程長く居ようとは思つては居なかつたが、此機會に昔の話もし度く思つて、寺の方へ三日の間参籠すると云はせる爲めに

僧を呼んだ。御堂の騒ぎは夜通し續いて居た。

夜が明けたので右近は知つた僧の坊へ姫君を伴つて行つた。靜かに話し度いと思ふからであらう。質素な風で來て居るのを恥しがる姫君を右近は美しいと思つた。

「私は思ひがけない大きいお邸へお勤めして澤山の女の方を見ましたが、殿様の奥様の御容貌に比べてよい程の方は無いと長い間思つて居ました。それにお小さいお姫様が又お美しい事は道理な事です。が何んなに大事がられていらつしやるか、全く御幸福そのものの様な方です。併しかうして御質素な風をなさつた姫君を拜見して、其奥様や二條院のお姫様に劣つていらつしやると思へませんので嬉しう御座います。殿様は仰つしやるのですよ、自分の父君の陛下の時から、女御をはじめ多くの女性は見て來たが、今の陛下の御母様のお后の御美貌と、自分の娘の顔とが最勝れたものと思はれると。殿様と奥様お二人の揃ひも揃つたお美しさを拜見する丈けでも命も延びる氣がするのですよ。姫君は、私がそんなに思ふ二條院の奥様に何處一つ劣つてはいらつしやいません。物には限りがあつて、勝れた美貌と申しても圓光を後に負つていら

つしやる譯ではありませんが、是れが眞實にお美しいお顔と申上げていゝので御座いませう。」
右近は微笑んで姫君を眺めて居た。少貳の未亡人も嬉し相である。

「こんな勝れたお生れつきの方を、今一步で暗い世界へお沈めして了ふ所でした。いゝ智恵を出して下さつて、姫君の御運を開いて上げて下さいませ。便宜も澤山おありでせう、お父様の大臣が姫君をお認め下さる様に計らつて下さいませ。」

姫君は恥しく思つて後を向いて居た。

「私も殿様のお傍につかへ乍ら、昔のお話も申上げ、何うなすつたかと姫君の事をもよく申すので、殿様は是非自分の所へ引取り度い、居所を聞いたら知らせるやうに、と仰つしやるのですよ。」

「源氏の大臣様は、何んなにお立派な方でも、よい奥様や、其他の奥様も幾人かおいでせう。それよりも眞實のお父様の大臣へお知らせする方法を考へて下さい。」

とおとゞが云ふので、右近は始めて、夕顔夫人を愛して死の床に泣いた人の源氏であつた事

を話した。

「何うしてもお亡りになつた奥様を忘れられなく思召して、奥様の形見と思つて姫君のお世話をし度い、自分は子供も少くて物足りないのだから、捜し出せたら自分の子を家へ迎へた様に世間へは知らせて置かうと、ずっと前からさう仰つておいでました。私の幼稚な心弱さから奥様の死をあなた方にお知らせする事も出来ないで居る中に、御主人が少貳になられてお暇乞ひに殿様の所へお出でになつたのを私はちらとお見かけしたのですが、何もお尋ね致し損ねて了ひました。それでも姫君をあゝの五條の夕顔の花の咲いた家へお置きになつて赴任なさるのかと思つて居りました。」

人々は終日昔の話をしたり、一所に念誦を行つたりして居た。御堂へ参詣する人々を下に見下す事の出来る僧坊であつた。初瀬川が前を流れて居た。右近は、

二もとの杉のたちどを尋ねずば布留川のべに君を見ましや

「此處で嬉しい逢瀬が得られたと申すもので御座います。」

と姫君に云つた。

初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢瀬に身さへ流れぬ

と姫君は泣いて居た。極めて感じのよい女性であつた。よくもこれ程立派な貴女に育てたこと、右近は少貳の未亡人に感謝し度い心になつた。母の夕顔夫人は唯だ若々しい大やうな女性に過ぎなかつたが、これは氣高い容姿の姫君と見えるのであつた。

日が暮れると御堂に行き、翌日は又坊に歸つて念誦の時を過ごした。秋風が溪の底から吹上つて来て肌寒さを感じるのが人々の心を更に悲しくした。姫君は右近の話から、父の家の繁榮などを知つて、もう救はれる時が来たのかも知れないと云ふ氣がした。歸る時は双方でよく宿所を尋ね合つて別れた。右近の自宅も六條院に近い所であつたから、九州の人の宿とも遠くなかつた。

右近は旅から直ぐに六條院へ出仕した。姫君の話をする機会を早く得度いと思ふ心から急いだのであつた。其晩は主人夫婦の前へは出ずに、部屋に引籠つて右近は又物思ひをした。翌日、

昨日自宅から上つて来た女房の幾人もある中から特に右近が夫人に呼ばれた。源氏も夫人の居間に居て戯談を云つた。

「面白い事が屹度あつたらう、獨身の者は。」

右近は山へ參つてお氣の毒な方を發見したと云つた。

「誰れ。」

と源氏は尋ねた。突然其の話をするのも、これ迄夫人にして居ない昔の話から筋を引いて居る事を、源氏にだけ云へば夫人が後で不快に思はないかと右近は迷つた。後で委しく申上げますと云つて、外の女房達も来たので其儘になつた。

灯などを點けさせて寛ろいで居る源氏夫婦は美しかつた。女王は二十七八になつて居た。盛り的美があつた。此僅かな時日の中にも新しく美が加はつたかと思はれた。姫君よりは矢張り一段の美があるやうで、幸福な人と不運な人との相異などを右近は思つた。寢室に入つてから脚をさすらせる爲めに源氏は右近を呼んだ。

「昔馴染同志が餘り仲よくしては奥様も機嫌を悪くはしないか。決して寛大な方かたでは無いから危いね。」

などと源氏は戯談を言つて笑つて居た。此頃は公職が閑散な方に變つて、自邸でも吞氣に女房などにも戯談を云ひかけて相手を試す事などを楽しむ源氏であつた。

「發見したつて、何んな人かね。えらい修驗者などと懇意になつて伴れて来たのか。」

「ひどい事を仰つしやいます。あの薄命な夕顔の縁りの方を見付けたので御座います。」

これ迄何處に居たのかと源氏に尋ねられても、在りの儘には右近は云へなかつた。

「寂しい郊外に住んでおいでだつたので御座います。昔の女房も半分程お附きして居ましたので古い話も致しました。」

「もう解つたよ。あの事情を御承知の無い方が居られるのだからね。」

源氏が隠す様に云ふと、

「私が御邪魔なのです。私は眠くて何のお話だか解らないのに。」

と女王は袖で耳を塞いだ。何んな容貌かなどと問うて、美しくなつたのを源氏は知つた。

「それはいゝ。誰ぐらゐ、此の人とは何う。」

「何う致しまして、そんなには。」

「得意な様で恥づかしい。何にせよ、私に似て居れば安心だよ。」

わざと親らしく源氏は云つた。それから後源氏は折々右近一人だけを呼出して姫君の問題に就て語り合つた。

「私はその人を六條院へ迎へる事にする。お父様の大匠に認めて貰ふ必要などは無いよ。大勢の子供に大騒ぎをして居られるのだからね。大した母から生れたのでも無い人が其中へ入つて行つては、結局又苦勞をさせる事になる。私の方は子供も少いしね。貴公子達が戀の對象にする程にも私はかしづいて見せる。」

右近は姫君の運がかうして開かれて行き相であると嬉しかった。

「不幸な亡なり方をなすつた奥様の代りにも、兎に角助けてお上げになりましたなら罪もお輕

くなりませう。」

「私を未だそんな風に責めるのだね。」

源氏は微笑みながらも涙ぐんで居た。

「短いばかり縁だつたと、私はいつもあの人の事を思つて居る。此家に集つて居る奥様達もあの時にあの人を思つた程の愛を感じた相手では無かつた。」

かう云つて、源氏は姫君へ最初の手紙を書いた。あの末摘花すゝめはなに幻滅を感じた事の忘れられない源氏は、そんな風に、逆境に育つた麗人の娘、大臣の實子も必ずしも期待に背かないとは思はれない不安から、手紙の書きやうで、先づ其人を判断しようとした。細々と書いて、

知らずとも尋ねて知らん三嶋江に生ふる三稜さんりやうのすぢは絶えじな

と其奥に書いた。右近は此手紙を自ら持つて行つた。姫君の衣服や女房達の着物の材料も澤山贈られた。源氏が夫人とも相談したらしく色や重ねの取合せなどに注意して選んで贈つたものなので、九州に居た人々の目には眩ゆく寫つた。姫君自身は、實父の手から少しの贈物でも

得られた方が何んなに嬉しからう、知らぬ人と交渉を始めようとは意外であると、それと無く贈物なども受けるのを苦しく思ふ様子であつた。右近は、母君と源氏との間に結ばれた深い因縁を姫君に聞かせた。人々も横から取りなして慰めた。

「源氏の大臣の御好意で御立派にさへおなりになれば、内大臣様の方からも極く自然に認めて頂けませう。親子の縁は絶えた様でも絶えないものなのです。」

皆が責めて姫君に返事を書かせた。田舎者の自分がと恥しく思ふ風であつたが、薫物の香を沁ませた唐紙の用箋に仄かに、

數ならぬみくりや何のすぢなればうきにしもかく根をとゞめけん

と書いた。字ははかない力の無いやうに見えるが品がよかつたので源氏は安心した。源氏は、少しじみな所ではあるが、六條院の東北の花散里の住居の中の西の對が圖書室になつて居るのを、書物は外へ移して其處へ姫君を住ませようと考へた。夫人にも昔の夕顔の話をした。夫人はさうした秘密があつた事を恨んだ。

「幾人もの戀人を持ちましたが、其中で可憐で可憐でならなく思はれた女として其人が思出される。」

と源氏は故人を思ふ情に堪へない風であつた。九月の頃の事であつた。

姫君が六條院へ移つて行く事は簡單にも行かなかつた。先づ綺麗な若い女房と童女を捜した。市女と云ふやうな者に頼んで伴れて來さしたが、誰の姫君かと云ふやうな事は知らさなかつた。一旦右近の五條の家に移つて、仕度も出來て、十月に姫君は六條院へ入つた。

「長い間私が捜させて居た人です。もう母親は死んで居るのです。中將をあなたの子供にして貰つて居るのですから、もう一人あつてもいゝでせう。何かにつけて教へてやつて下さい。」

と源氏は新しい姫君の事を花散里に語つた。花散里は大やうに承知をして言つた。

「眞實にそんな方がお在りになつたのですか。母親らしく世話を焼く事も是れ迄は餘り少くて退屈でしたから、好い事だと思ひます、御一所に住むのも。」

女房達は源氏の姫君である事を知らずに、

「又何んな方をお迎へになるのでせう、同じ所へね。」

と云つて居た。姫君は三臺程の車に分乗させた女房達と一所に六條院へ移つて來た。女房の服装なども右近が附いて居たから田舎びずに調へられた。其晩直ぐに源氏は姫君の所へ來た。九州へ行つて居た人達は、昔光源氏と云ふ名は聞いた事もあつたが、田舎住ひをしたうちに其稀れな美貌の人が此世に現存して居る事も忘れて居て、今仄かな灯の明りに几帳の綻びから少し見える源氏の顔を見て怖ろしくさへなつたのである。右近が開けた戸口を笑ひ乍ら入つて、源氏は縁側の前の座敷へ坐つたが、

「灯が餘りに暗い。戀人の來る夜のやうでは無いか。親の顔は見度いものだと聞いて居るが此明りでは何うだらう。」

と、几帳を少し横へ押しやつた。姫君が恥しがつて身體を細くして坐つて居る様子も好もしく、源氏は嬉しかつた。もう少し明るくしては何うか、餘り氣取り過ぎて居る様に思はれると源氏が言ふので、右近は燈心を少し掻き上げて近くへ寄せた。

「きまりを悪がり過ぎますね。」

源氏は少し笑つた。ほんとうに思つて居る様な姫君の目つきであつた。少しも他人の様には扱はず源氏は親らしく、

「かうして逢ふ事が出來ても未だ夢の様な氣がしてね。それに昔の事が思ひ出されて。」

かう云つて目を拭いた。夕顔との死別の場を悲しく思出したのであつた。年を數へて見て、「親子であつて、こんなに長く逢へなかつたと云ふやうなのは例も無い事でせう。恨めしい運命でしたね。もうあなたは少女の様に恥しがつてばかり居てよい年でも無いのですから、今日迄の話も私はしたいのに、何故あなたは黙つてばかり居ますか。」

と源氏は恨みを云つた。何と云つてよいか解らぬ程姫君は恥しいのであつたが、

「足立たずで（かぞいろはいかに哀れと思ふらん三とせになりぬ足立たずして）遠い國へ流れ著きました頃から、私は生きて居りました事が、死んで居りました事が解らないので御座います。」

とかすかに言ふのが、夕顔の聲其儘であつた。源氏は微笑して、云つた。

「あなたに人生の苦しい道ばかり通らせて来た酬いは、私がしないで誰にして貰へますか。」

源氏は聰明らしい姫君の物の言ひ振りに満足して、右近に種々な注意を與へて歸つた。源氏は夫人にも其事を話した。

「かうした麗人を娘に持つて居る事を世間へ知らせるやうにして、よくお出でになる兵部卿の宮などに懊惱をおさせするのだね。大層にかしづいて見せよう。まだ成つて居ない貴公子達の懸想振りを澤山拜見しよう。」

「變な親心ですね。求婚者の競争を煽るなどはひどい方。」

「さうだつた、あなたを今の様な私の心だつたらさう取扱ふのだつた。無分別に妻などにはしないで、娘にして置くのだつた。」

夫人が顔を赤らめたのが如何にも若々しかつた。源氏は硯を手許へ引寄せて無駄書きのやうに書いて居た。

戀ひわたる身はそれながら玉鬘いかなる筋を尋ね來るらん

可哀相に、とも獨語するのを見て、玉鬘の母であつた人は、前に源氏の云つた通りに、深く愛して居た人らしいと女王は思つた。

源氏は子息の中將にも話して聞かせたので、中將は直ぐに玉鬘の御殿へ訪ねて行つた。

「こんな弟が居ります事を御念頭にお置き下さつて、御用があつたらお呼び下さい。」

と忠實な風に云ふのを聞いて居て、眞實の事を知つて居る者はきまり悪い氣がする程であつた。

これ迄になつたのも、豊後介の誠意の賜物である事を玉鬘も認めて居たし、右近も豊後介を賞めて居た。さうして玉鬘附きの家従や執事などが決められた時、豊後介も其一人に登用された。

年末になつて、新年の室内の裝飾、春の衣裝を配る時にも、源氏は玉鬘を尊貴な夫人等と同じに取扱つた。何んなに好い趣味を知つた人と見えても、未だ何んな間違つたものゝ取合せを

するか解らぬ不安があつて、玉鬘へは既に衣装に出来上つた物を贈る事にしたが、其時に方々の織物師が力をこめて作つた厚織物の細長や、小掛の仕立てたのを源氏は手許へ取寄せて見た。女王は裁縫係りの所に出来上つて居るものも、手許で作らせた物も、皆出して、源氏に見せた。紫の女王はかうした服飾類を作らせる事に趣味と手腕を持つて居る點でも、源氏は此夫人を尊重して居た。彼方此方の打物の工場から仕上つて来て居る糊をした打絹も源氏は見比べて、濃い紅、朱の色など様々に分けて、衣櫃などに添へて入れさせて居た。源氏の命じるまゝに贈物が作られて行つた。

「お召しになる方のお顔によく似合ひ相なのを見立て、お上げなさいまし。著物と顔が離れ離れなのはよくありませんから。」

「素知らぬ顔であなたは著る人の顔を想像しようとするのですね。それにしてもあなたは何れを著ますか。」

と源氏は笑つた。紅梅色の浮模様のある紅紫の小掛、薄い藤脂紫の服は夫人の著料として源

氏に選ばれた。櫻の色はないろの細長ほそながに、明るい赤の搔練かきねりを添へて此處の姫君の春着が選ばれた。薄お納戸色に海草や貝が模様になつた、織り方に大した技巧の跡は見えながらも、見た目の感じの派手で無い物に、濃い紅の搔練かきねりを添へたのが花散里はなちり。眞赤な衣服に山吹の花の色はないろの細長ほそながは同じ所の西の對たいの姫君の著料に決められた。見ぬやうにし乍ら、夫人は密かに點頭かれる所があるのであつた。内大臣が華かで綺麗な人と見え乍らも艶えんな所の混つて居ない顔に玉鬘たまかづらの似て居ることを、此黄色の上着の選ばれた事で想像したのであつた。色に出して見せないのであるが、源氏は其の方を見た時に、夫人の心の平靜でないのを知つた。

「もう著る人達の容貌かたちを考へて著物を選ぶ事は止める事にしよう。貰つた人に腹を立てさせるばかりだ。」

こんな事を云ひ乍ら、源氏は末摘花すゝめはなの著料に柳の色やなぎいろの織物の、上品に唐草の織られてあるのを選んで、其れが艶えんな感じのする物であつたから、人知れず微笑まれた。梅の折枝うしげの上に蝶と鳥の飛び交つて居る支那風な氣きのする白い掛かに、濃い紅の明るい服を添へて明石夫人のが選ば

れたのを見て、紫夫人は侮辱されたのに似た様な気が少しした。空蟬の尼君には青鈍色の織物の面白い上着を見附け出したのへ、源氏の服に仕立てられてあつた薄黄の服を添へて贈るのであつた。同じ日に着る様にと何方へも源氏は言ひ添へて遣つた。自身の選定した物がしつくりと似合つて居るか何うかを源氏は見に行かうと思ふのである。

夫人達からは其れぞれの個性の見える返事が遣され、使へ出した纏頭も様々であつた。末摘花は東の院に居て、六條院の中の事でないから纏頭などは氣の利いた考へを出さねばならぬのに、此人は形式的にするだけの事はせず居られぬ性格であつたから纏頭も出したが、山吹色の掛の袖口の邊りがもう黒ずんだ色に變つたのを、重ねも無く一枚きりであつた。その手紙は香の薫りのする檀紙の少し年數物になつて厚く膨れたのへ、

「何う致しますせう。頂き物は却つて私の心を暗く致します。」

著て見ればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖を濡らして

と書いてあつた。非常に昔風な字である。源氏はそれを眺め乍ら可笑しくてならぬ様な笑ひ

顔をして居るのを、何があつたのかと云ふ風に夫人は見て居た。

「立派な歌人なのだね、此女王は。昔風の歌詠みはから衣、袂濡るゝと云ふ恨みの表現法から離れられないのだ。私なども其仲間だよ。凝り固つてゐて新しい言葉にも表現法にも影響されない所がえらいものだ。御前などの歌會の時に古い人達が友情を云ふ言葉は必ずまどろいふ三字が使はれるのも厭な事だ。昔の戀愛をする者の詠む歌には相手を悪く見て、仇人と云ふ言葉を三句目に置く事にして、それさへ中心にすれば前後は何とでも附くと思つたものらしい。」などと源氏は夫人に語つた。

「歌の手引草とか、歌に使ふ名所の名とかの集めてあるのを始終見て居て、其中にある言葉を抽出して使ふ習慣の人は、其れより外の作り方が出来ならしい。常陸の親王のお書きになつた紙屋紙の草紙と云ふものを、讀めと云つて女王さんが貸して呉れたが、歌の髓腦、歌の病、そんな事が餘り澤山書いてあつたから、もともと其方の才分の少い私などは、それを見たからと云つて歌の良くなる見込みは無いから、難しくてお返ししましたよ。」

滑稽でならない様に源氏に笑はれて居る末摘花の女王は可哀相である。夫人は眞面目に、「何故直ぐにお返しになりました。寫させて置いて姫君にも見せて上げた方がよかつたでせうに。私も其本は持つて居りましたが虫が穴を開けて了ひました。其御本に通じ乍ら歌の下手な方よりも、全然知らぬ私などもつとひどい譯でせう。」

と云つた。

「姫君の教育にそんな物は必要でない。思想的に確かな人にだけして置いて、外は穩かな瑕の無い程度の女に私は教育し度い。」

源氏は末摘花へ返事を書かうとする風も無かつたが、夫人に勧められて、直ぐに返歌が書かれた。

かへさんと云ふにつけても片しきの夜の衣を思ひこそやれ

「御道理です。」

と云ふ手紙であつたらしい。

初音

新春第一日の空の完全に麗かな光の下には、何の家の庭にも雪の間の草が緑の氣配を示すし、春らしい霞の中では、芽を含んだ木の枝が生氣を見せて煙つて、人の心ものびやかになつて行く。まして六條院の庭の初春の眺めには格別な面白さがあつた。

春の女王の住居は取分け勝れて居た。梅花の香も御簾の中の薫物の香と紛らはしく漂つて居た。女房達も若い人達は姫君付きに分けられて、少し年の多い者ばかりが紫の女王の傍に居た。彼方此方に一團を作つて、女房達は齒固めの祝儀などを仲間同志でやつて居た。鏡餅などを取寄せて今年中の幸福を祈るのに興じ合つたりして居る所へ源氏が一寸顔を見せた。

「皆それぞれ違つた事の上に祝福あれと祈つて居るのだらうね。少し私に内容を洩して呉れないか。」

と微笑む源氏の美しい顔を見る事が、今年の春の最初の幸福と人々は思つた。朝の間は参賀の人が多くて騒しく時が経つたが、夕方近く、他の夫人達へ年始の挨拶に出掛けようとして、化粧した源氏を見る事は實際幸福でなくて何であらうと思はれた。

少し戯れも混ぜて源氏は夫人の幸福を願つた。

うす氷解けぬる池の鏡には世の類ひなき影ぞ並べる

夫人は、

曇りなき池の鏡によろづ代をすむべき影ぞしるく見えける

と云つて、二人は長く變らぬ愛を誓ひ合ふのであつた。

丁度元日が子の日に當つて居た。姫君の居る座敷へ行つて見ると、童女や下仕への女が前の山の小松を抜いて遊んで居た。北の御殿から色々と美しく作られた菓子おひげと料理の破子詰やぶこづめめなどが此處へ贈られて來た。五葉の枝には作り物の鶯が止まらせてあつて、それに手紙が附けてある。

年月をまつに引かれて経る人に今日鶯の初音聞かせよ

「音せぬ里の」(今日だにも初音聞かせよ鶯の音せぬ里は住むかひもなし)と書かれてあるのを讀んで、源氏は身に沁むやうに思つた。正月乍らも零れて來る涙を何うしやうも無かつた。源

氏は硯の世話などを嫌き乍ら、姫君に返事を書かせた。この可愛い姿を別れた日から今日まで眞實の母親に見せてやつて居ないのは罪作りな事と心苦しく思つた。

引き分れ年は経れども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや

少女の作で、有の儘に過ぎた歌であつた。

夏の夫人の住居は時候違ひの所爲か非常に静かであつた。源氏と夫人との間にはもう少しの隔ても無かつた。今では肉體の愛を超越した、しかも精神的には永久に離れまいと誓ひ合ふ二人であつた。几帳を隔て、花散里は坐つて居たが、源氏がそれを手で押しやると、花散里はさうする儘になつて居た。お納戸色は人を華かに見せないものであるが、此人は髪具合などからも、もう盛りを通り過ぎた人になつた居た。衰退期の顔を、化粧で何うするといふ事もしない程、自分の心が信じられて居るのが嬉しいと、源氏は逢ふ毎に言つて居た。永久に變つて行かない自身の愛と、此の女を持つ信頼は理想的なものときへ源氏は思つて居た。親しい調子で暫く語つた後、西の對の方へ源氏は行つた。

玉鬘が此處へ住んで未だ日の浅いものにも關らず西の對の空氣はしつくりと落付いたものになつて居た。あの際立つた山吹の色の細長が似合ふ顔と源氏が見立てた通りに美しい玉鬘は、暗い陰影といふものは何處からも見出せない輝かしい容姿を持つて居た。苦勞をして居た間に少し少くなつた髪が、肩の下の方で稍細くなつてさらさらと分れて著物の上に懸つて居るのも、却つて清らかな感じがした。此人を情人にまでせずには置かれたいのでは無からうか、肉親の様にまでなつて暮して居乍らも物足りない氣がするのも自分乍ら奇怪だと、源氏には思はれて表面に此感情を現すまいと抑制して居た。

「遠慮無く、私の居る方へも出ていらつしやい。琴を習ひ初めた女の子も居ますから其稽古を見ておやりなさい。」

玉鬘は、仰せの通りに致しますと云つた。

日の暮方に源氏は明石の住居へ行つた。居間に近い渡殿の戸を開けた時から、もう御簾の中の薫香の匂ひが立ち迷つて居た。居間に明石の姿は見えなかつた。見廻すと、硯の邊りに本な

どが出て居た。支那の東京錦の縁を取った褥しよむの上には琴が出て居た。火鉢の侍従香が燻つて、衣服に焚きしめる衣被香えびかぢの香と混つて居た。その邊に散つた紙には、手習ひ風に無駄書がしてあつた。姫君から來た鶯の歌の返事に興奮して、身に沁む古歌なども幾つか書かれた中に、自作もあつた。

珍しや花のねぐらに木づたひて谷の古巢をとへる鶯

源氏はこれ等を見乍ら微笑んで居た。其横へ源氏が何かをいたづら書きをして居る時、明石は膝行り出た。思ひ上つた女性ではあるが、流石に源氏には謙遜な態度であつた。此聰明さが明石の魅力でもあつた。白い服へ鮮かにかゝつた黒髪の裾が少し薄くなつて、綺麗に分れた筋を作つて居るのも却つて艶なまめかしかつた。新春の第一夜を、紫夫人の腹立ちを憚り乍らも、源氏は此處に泊つた。

源氏は未だ漸く曙ぐらゐるの時刻に南の御殿へ歸つた。こんなに早く出て行かないでもと明石は思つた。

「一寸うたゝ寝をして寝入つて了つた私を、迎へにも遣して呉れませんでしたね。」

と源氏は夫人の機嫌を取つて見たが、打解けた返辭も無かつた。源氏は其儘寝入つた風をして朝はずつと遅く起きた。正月の二日は臨時の饗宴がある爲め、忙しい風をして源氏はきまり悪さを紛らせて居た。親王方も高官達も殆ど皆六條院の新年宴會に出席した。多數の縉紳は皆きらびやかに装つて居たが、源氏の前では光彩を失つて居た。年若な高官達は、妙齡の姫君が新たに加つた六條院の席へは、夢中になる程容姿を氣にして來て居た。前の庭の梅が少し咲き始めたこの黄昏時に樂音が面白く起つて來た。「この殿」が最初に歌はれ、華かな氣分が先づ作られた。源氏も時々聲を添へた。「福草ふくくさの三つ葉四つ葉に」と云ふ邊りが殊に面白く聞かれた。かうした華かな、派手な人出入りの物音も紫の女王を除いた他の夫人達は、遠く離れて聞いて居るだけであつた。まして東の院に居る人達は、年月に添へて退屈と寂しさが加はつて行つた。併し頼み世の中と隔離した山里に住んだ氣になつて居て、源氏の冷淡さを恨む氣にもなれなかつた。

新年の騒ぎの少し静まつた頃になつて源氏は東の院へ來た。末摘花の女王は無視し難い身分を思つて、形式的には非常に尊貴な人として取扱つて居た。昔澤山あつた毛も年々に少くなつて、今は白い筋も混り、面と向ふのも氣の毒であつた。柳の色も感じが悪かつたが、着手もよく無かつたからである。陰氣な黒ずんだ赤の搦練の糊氣の強い一襲ねの上に、贈られた柳の色の織物の小褂が寒さうであつた。春の霞にも是れだけは紛れまいと思はれる程鼻の色が赤かつた。かうして變らぬ愛をかける源氏に眞心から信頼して居る様子に同情された。こんな所にも常識の不足した點のあるのが哀れに思はれて、源氏は自分だけでも此人を愛してやらねばと考へて居た。末摘花の話す聲は寒さうに慄へて居た。

「着物の世話などする人は居ますか。外見は何うでも着物を重ねて居る方がいいのですよ。」女王もさすがに可笑し相に笑つた。

「醍醐の阿闍梨さんの世話に手がかりまして、仕立物が間に合ひませんでした。それに毛皮なども借りられて了ひまして寒いのです。」

阿闍梨と云ふのは鼻の非常に赤い兄の僧の事であつた。源氏は餘りに見得を知らな過ぎる女とも思つた。

「毛皮はお坊様に上げた方が適當でいゝのです。それよりも、白い着物と云ふ物は何枚でも重ねていゝのですからね。入用な物も遠慮無く言つて遣して下さい。」

と云つて、源氏は隣の二條院の方の藏を開けさせて絹や綾を多く紅の女王に贈つた。荒れた所も無いが、男主人の平生住まない家は何處となく寂しかった。前の庭の木立だけが春らしく紅梅も咲いて居た。

空蟬の尼君の住居へ源氏は來た。目立たぬ一室に居て、住居の大部分を佛間に取つた空蟬が佛勤めに傾倒して暮す様子も哀れに見えた。經卷の作りやう、佛様の飾り、一寸とした關伽の器具などにも空蟬のよい趣味が見えて懐しかった。青鈍色の几帳の蔭に坐つた尼君の袖口の色だけには外の淡い色彩も混つて居た。源氏は涙ぐんだ。

「松が浦島（松が浦島今日ぞ見るうべ心あるあまも住みけり）だと思つて神聖視するのに留め

て置かねばならないあなたなのです。昔から何といふ悲しい二人でせう。併しかうして逢つて話をする位の事は永久に出来るだけの因縁があるのですね。」

「唯今かうして暮らさせて頂けることで、私は前生に御縁の深かつた事を思つて居ります。」

「あなたを虐げた過去の追憶に苦んで、折々今でも佛にお詫びしなければならぬのが私です。しかし他の男は私の様に純なもので無い事は、あなたもそれからの経験でお知りになつたでせう。」

繼息子の邪な戀に苦しめられた事を源氏は聞いて居ることゝ、女は恥しかつた。

「こんなみじめな晩年をお見せ致して居る事で誰の過去の罪も清算される筈で御座います。これ以上の報いが何處に御座いませう。」

空蟬は泣いた。過去の戀人で現在の尼君として別の世界の者とするだけでは満足の出來かねる氣もしたが、源氏が戀の戯れを云ひかけ得る相手では無かつた。いろいろの話をし乍らも、せめて是れだけの頭の良さがある人であればと、末摘花の住居の方を源氏は眺めた。

源氏の多くの戀人達も、女に對して驕慢な心になり相な境遇にゐる源氏ではあるが末々の戀人にまで誠意を忘れずに持つて呉れるので、慰められて年月を送つて居た。

今年の正月には男踏歌があつた。御所から直ぐに朱雀院へ行つて、其次に六條院へ舞手は廻つた。夜の明け方になつて居た。月が明る射して薄雪の積つた六條院の美しい庭で行はれる踏歌が面白かつた。舞や音樂の上手な若い役人も多く、笛なども巧みに吹かれた。他の二夫人等にも見物に来るやうに源氏が勧めてあつたので、南の御殿の左右の對や渡殿を席に借りて皆來て居た。玉鬘の姫君は、南の寢殿に來て此方の姫君に面會した。紫夫人も同じ所に居て、几帳だけを隔て、玉鬘と話した。踏歌の組は、時間も遅くなり、饗應などは簡單と思つて居たが普通以上の歡待を受ける事になつた。光の強い一月の曉の月夜に、雪は次第に降り積んで行つた。松風が高い所から吹き下して來る凄じい感じにももう一步でなり相な庭に、もう折目もなくなつた青色の上着に白鬘を下にしたゞけの服装に、見榮えの無い綿を頭に被つた舞手が出て居るだけの事も、所がら面白くて命の延びる程に觀衆は思つた。源氏の子息の中將と内大臣の

公子達が舞手の中では殊に華かに見えた。ほのぼのと東の空が白んで行く光りに、稍大降りな雪の影が見えて寒い中で「竹川」を歌つて右に寄り左に集る舞手の姿など美しかった。各夫人の見物席には、美しい色を重ねた女房の袖口が、曙の空に春の花の錦を霞が長く一段だけ見せて居る様であつた。舞人は「高巾子」といふ脱俗的な曲を演じたり、自由な壽詞に滑稽味を取り混ぜたりもして、慣例の纏頭である錦を一袋づつ頭に戴いて歸つた。夜がすっかり明けて二人は南御殿へ去つた。源氏はそれから暫く寝て八時頃に起きた。

「中將の聲は辨の少將の美音にも餘り劣らなかつたやうだ。私は中將などを眞面目な役人に仕上げる教育の方針を取つて、私自身の眞面目であり得なかつた名譽を回復させ度く思つて居たが、矢張り藝術的な所を無くさせぬ様にしなければならぬのを知つた。何んな欲望も抑制した眞面目顔が其人の全部であつては厭なものですよ。」

などと源氏は夫人に言つた。萬春樂を口誦みにして居た源氏は又、夫人達が始めて此方へ來た記念に、今一度集つて音楽の合奏をして遊びたい氣がする、と云つて、祕藏の樂器をそれぞ

れ袋から出して塵を拭はせたり、緩んだ絃を諦めさせたりなどして居た。夫人達は其事を何んなに晴れがましく思つた事であらう。

胡

蝶

三月の二十日過ぎ、六條院の春の御殿の庭は平生にもまして多くの花が咲き、多く轉る小鳥が來てゐた。築山の木立、池の中島の邊り、廣く青み渡つた苔の色などを、たゞ遠く見て居るだけではと、源氏は、若い女房達の爲めにかねて造らせてあつた唐風の船へ急に裝飾などをさせて池へ浮べる事にした。船下しの最初の日は御所の雅樂寮の伶人を呼んだ。親王方や高官達の多くが參會された。此頃中宮は御所から歸つておいでになつた。去年の秋「心から春待つ園」の挑戦的な歌をお送りになつたお返しをするのに適した時期であると、紫の女王も源氏も思つたが、尊貴なお身の上では一寸御花見に御招待申上げるといふ事も出来なかつた。そこで若い宮の女房達を船に載せて西東續いた南庭の池の間に中島の岬の小山が隔てになつて居るのを漕ぎ廻らせた。東の釣殿へは此方の若い女房が集められてあつた。

龍頭鶴首の船はすつかり唐風で、梶取り、棹取りの童侍は耳の上にも、みづらに結つた髪をして支那風であつた。大きい池の中心へ船が出て行つた時には女房達は外國の旅をして居る氣がした。彼方にも此方にも霞と同化した様な花の木の梢が錦を引渡して居て、御殿の方は遙々と見

渡され、其方の岸には枝を垂れて柳が立ち、殊に派手に咲いた花の木が並んで居た。

餘所では盛りの少し過ぎた櫻も此處ばかりは眞盛りであつた。廊を廻つた藤も船が近づくに従つて鮮明な紫になつて行く。池に影を映した山吹も盛りであつた。鶯鶯が波の綾の目に紋を描いて居た。

春の池や井手の河瀬に通ふらん岸の山吹底も匂へり

と歌を詠んだりして、若い人達は水の上の遊びに時の經つのを忘れて居た。

暮れかゝる頃「皇響」と云ふ樂の吹奏が波を渡つて來て、人々は釣殿の休息所へ入つた。此處は簡單にしかも艶な飾りがしてあつた。各夫人の若い女房達が競つて華美な姿をして待ち受けて居たのは美しかつた。珍らしい樂や公達の舞も若い女には十分満足を與へた。夜になると、源氏は前の庭に篝を點けさせ、階段の下の苔の上へ音樂者を招いて、堂上の親王方高官達と堂下の伶人とで大合奏が行はれるのであつた。雙調を笛で吹き出したのを始めに、其音を待ち取つた絃樂が上で起つた。絃樂の人は華かな音を掻立て、歌手は「安名尊」を歌つた。生きが

ひのある事を感じ乍ら、庶民達までも六條院の門前の馬や車の立てられた蔭へ入つて聞いて居た。

終夜音楽はあつた。呂の樂を律へ移すのに「喜春樂」が奏されて、兵部卿の宮は「青柳」を二度繰返して歌はれた。それには源氏も聲を添へた。夜が明け放れた。此朝ぼらけの鳥の囀りを、中宮は物を隔て、羨しくお聞きになつたのであつた。常に春光の満ちた六條院ではあるが外來者の若い興奮をそゝる對象の無い事をこれ迄物足りなく思つた人もあつたが、西の對の姫君なる人が現れて、これと云ふ缺點も無く、源氏が大事にかしづく事が世間に知られた今日では、源氏の豫期通りに、思慕を寄せる者、求婚者も多かつた。自分の位地に自信のある者は、女房の手を経て姫君へ手紙を送る事も、直かに源氏へ申出る事も出来るが、又心だけを惱まして居る若い公達などもあつたらうと思はれた。其の中には、眞實の事を知らない内大臣家の中将なども居たやうである。兵部卿の宮は夫人を亡くしてもう三年餘りになつて居られたので、最も熱心な求婚者であつた。今朝も随分酔つた風を作られて、藤の花などを簪に挿して、風流な

亂れ髪を見せて居られた。源氏は心の中では計畫通りになつたと思ひ乍ら、つとめて素知らぬ顔をして居た。杯の廻つて來た時、迷惑をお見せになつて、宮は手をお出しにならなかつた。

「私が或望みを持つて居ないのでしたら、逃げて了ふ所です。もういけません。」

紫のゆるゑに心をしめたれば淵に身投げんことや口惜しき

と云つて源氏に其杯を譲られた。源氏は満面に笑みを見せて、

淵に身を投げつべしやとこの春は花のあたりを立ちさらで見よ

と引留めるので、宮もお歸りになれなかつた。今朝の管絃樂は又一層面白かつた。此日は中宮が僧に行はせられる讀經の初めの日であつたから、夜を明した人々は部屋で休息してから正装に更へて出る者も多かつた。源氏の盛んな權勢に助けられて中宮は百官の全い尊敬を得ておいでになる形であつた。春の女王の好意で佛前へ花が供へられた。それは殊に美しい子が選ばれた童女八人に、蝶と鳥を形どつた服装をさせ、鳥には鈴の花瓶に櫻を挿したのを持たせ、蝶には金の花瓶に山吹を挿したのを持たせた。南の御殿の山際の所から船が中宮の御殿の前へ來

る頃、微風が出て瓶の櫻が少し水の上へ散つて行つた。

天幕を此方の庭へ移す事はせずに、左へ出た廊を樂舎の様にして、樂が吹奏されて居た。童女達は階梯の下へ行つて花を差上げた。香爐を持つて佛事の席を練つて居た公達が取次いで佛前へ供へた。紫の女王の手紙は子息の中將が持つて來た。

花園の胡蝶をさへや下草に秋まつ虫はうとく見るらん

中宮はあの紅葉に對しての歌であると微笑された。春をおけなしになる事も出来まいと、女房達もすつかり降参して云つて居た。麗かな鶯の聲と鳥の樂が混り、池の水鳥も自由に囀る時、吹奏樂が終りの急な破になつた。蝶ははかない風に飛び交つて垣の下に咲き零れた山吹の中へ舞つて入る。中宮の亮等が手に手に宮の纏頭を持つて童女へ賜つた。鳥には櫻の色の細長、蝶へは山吹襲ねであつた。伶人は白の一襲とか巻絹とかで、中將へは藤の細長を添へた女の装束をお贈りになつた。中宮の御返事は、

「昨日は泣き出し度くなります程羨ましく思はれました。」

こてふにも誘はれなまし心ありて八重山吹を隔てざりせば
と云ふのであつた。

玉鬘の姫君はあの踏歌の日以來、紫夫人の所へも手紙を書いて送る様になつた。落ち付いた懐しい氣持の人である事だけは認められて、花散里からも紫の女王からも玉鬘は好意を持たれた。結婚を申込む人は多かつたが、いゝ加減に自分だけで誰にとは決められぬと源氏は思つて居た。自分でも親の心になり切つて了ふ事が不可能な氣がするの、實父に玉鬘の存在を報せようかといふ考への起る事も間々あつた。

中將は親しい氣持で玉鬘の居間の御簾の近くに來て話す事もあつた。女は恥しく思つたが、兄弟といふ事になつて居るからと、右近達は睦じくする事を勧めるのであつた。中將は何時もち眞面目で、姉と信じて居た。内大臣家の公達も中將に伴はれて、心を仄めかす風に來たりもしたが、さうした問題では無しに懐しい氣持ちで眞實の兄弟達を玉鬘は眺めて居た。實父に會ひ度くは思ひ乍ら素振りには見せず、信頼し切つた様子だけが源氏に見えるのも一層可憐に思

はれた。母の夕顔の佳さが其儘此人にもあつて、其れに才女らしい所が添つて居た。

衣更へをする初夏となつた。閑暇の多い源氏は、又しても西の對へ出掛けては、玉鬘へ送られた多くの男性からの懸想文を読むのであつた。或るものへは返事を書く様に勧めたりするのが玉鬘は苦しく思つた。兵部卿が、もう焦躁つて恨みらしい事を澤山お書きになつた手紙を見出して、源氏は心から可笑し相に笑つた。是非返事を書くやうに、交際を初める價值のある男と云つては此宮以外にあるとも思へないからなどと若い女の心を惹き相な事を源氏は云つたが玉鬘は恥しくばかり聞いて居た。高官の典型の様に眞面目な右大將からの手紙もあつた。さうした幾通かの中に、薄青色の唐紙の薫物の香を深く沁ませたのを細く小さく結んだのがあつた。開けて見ると、

思ふとも君は知らじな湧き返り岩洩る水に色も見えねば

と美しい字で書いてあつた。書き方に近代的なはかなさが見えた。何んな人のか、訊いてみてもはつきりした玉鬘の返辭が無いので、源氏は右近を呼んだ。

「こんな手紙を遺す人達には細心な注意を拂はなければいけない。返事をす可き人には返事をさせなさい。近頃の男が暴力で戀を遂げる様な事も、餘りに冷淡だ、恨めしいといふ氣持が積り積つての結果なのだ。花や蝶につけての返事にして置くのも、相手の熱心をそゝる効果のあるものだからね。全體女は動いた感情をありの儘に相手に見せるのは必ず結果はよく無いが、宮や大將に何時迄も返事をせず自尊心を持ち過ぎた女の様には思はれるのも、此の人には相應はしく無い事だから。」

などと云つて居る間、そむけた玉鬘の横顔は美しかった。撫子色の細長に、派手な薄色の小掛の取合せも若々しい感じがした。紫夫人などの感化から、今では非常に柔かな繊細な美が一舉一動に現れるのであつた。

人の妻にしては後悔が残りはしないかと源氏は思つた。父親として見るには不似合な源氏の若さは夫婦であつたら最もふさはしからうと、二人を眺めて右近は微笑んで居た。

「外からのお手紙のお取次は決して誰も致しません。御返事は殿様が書くやうに仰しやる分だ

けで御座います。それも迷惑相にお書きになつて。」

と右近は云つた。それにしても此控へ目な結んだ手紙は誰からかと、微笑して訊き乍ら源氏はその手紙に目を落した。

「是非と云ふので、内大臣家の中將様が此方の海松子を前に知つて居られるので、海松子が持つて参つたので御座います。」

「露骨でなく上手に切尖を外させる様に工風するのだね。面白い手紙だ。」

源氏は手紙をなほも手にして居た。

「内大臣家へ名乗つて行くのも、幸福か何うか。あなたが結婚してから出會ふ機会を捉へた方がいゝでせう。併し結婚の相手としては、兵部卿の宮は戀人も多く、夫人になる人がうまく嫉妬を見せないで穩かに行けばいゝが。右大將は若い時から一所の年上の夫人と別れる爲めにも新たな結婚をしたがつて居るのですが、面倒な筋があります。もうあなたには自分の結婚の相手に就ての判断は出来ない譯は無いやうに思ふ。私を親と思つて相談をして下さるといゝと思

ひます。」

「未だ物心のつきません頃から、親といふものを目に見ない世界に居りましたので、親が何んなものですか、親に對する氣持が何んなものですか、私には解らないので御座います。」

「では、親の無い子は育ての親を信賴す可きだと云ふ世間の云ひ慣はしのやうに、私の誠意を認めて行つて呉れますか。」

戀しい心の芽生へて居る事などは恥しくて源氏は云ひ出せなかつた。それとなく、さういふ氣持の言葉を混ぜもしたが氣の附かぬ様子であつた。源氏は歎息し乍ら歸りかけたが、縁に近く生へた吳竹が若々しく伸びて風に枝の動く姿に心が惹かれて、暫く立ち留つて、

ませのうちに根深く植ゑし竹の子のおのがよよにや生ひ別るべき

「其時の氣持が想像されます。」

と外から御簾を引上げた。玉鬘は膝行つて出て云つた。

今さらになかならんよか若竹の生ひ初めけん根をば尋ねん

「却つて幻滅を味ふ事になるでせうから。」

父を父と呼ぶ機会が何日來るのか、實父と云つても源氏ほどに濃やかな愛を見せては呉れないのでは無いかなどと、古い小説などから人生を教へられて居る玉鬘は、心の中でさう思つて居た。

源氏は別れ際の玉鬘の言葉に、一層其人を可憐に思つた。そして、美しい才氣も見える人などと夫人にも賞めて聞かせた。夫人は、良人が單に養女として愛する以外の愛を其人に持つ事になつて行く徑路を察した。

「全然あなたを信用して頼つて居ては何んな事におなりになるかとお氣の毒ですわ。私にも経験があります。惱ましい様な御様子をお見せになつた事など、そんな事は私はいくつも覚えて居りますもの。」

微笑し乍ら云ふ夫人の神経の鋭敏さに驚いた源氏は、疚しくて、もう其話に觸れようとしなかつた。自分は妻の疑ひ通りになつて行くのでは無いかと云ふ不安を覺えた。

しめやかな夕方、前庭の若楓と柏の木が華かに繁り合つて居るのを見乍ら「和して又清し」と詩の句を口誦んで居たが、玉鬘の豊艶な顔がそれにも思ひ出されて西の對へ行つた。手習ひなどをし乍ら氣樂な風で居た玉鬘が起き上つた恥し相な顔の色が美しく思はれた。其柔い風にあふと昔の夕顔が思ひ出された。

「あなたに初めて逢つた時には、こんなに迄お母様に似て居るとは見えなかつたが、時々あなたをお母様だと思ふ事がありますよ。その點で随分私を悲しがらせるあなただ。中將が少しも死んだ母に似てゐないので、親子といふものはあれ位のものかと思つてゐましたが。」

源氏は涙ぐんで居た。其處に置かれてあつた箱の蓋に菓子と盛つてあつた橘の實を遊び乍ら、橘のかをりし袖によそふれば變れる身とも思ほえぬかな

「故人に其儘なあなたを家の中で見る事は夢では無いかと嬉しいにつけても、又昔が偲ばれま

す。あなたも私を愛して下さい。」

と云つて、玉鬘の手を取つた。女はこんな風に扱はれた事が無かつたから急に憂鬱になつて

唯腑に落ちぬ風を見せたゞけであつた。

袖の香をよぞふるからに橋のみさへはかなくなりもこそすれ

と大やうに云つたが、不安氣に下を向いた。手がよく肥えて肌目は細くて白かつた。源氏は此時になつて初めて戀を嚇いた。女は何うすればよいかと思ふと、身に慄えの出て來るのも源氏に感じられた。

「何故そんなに私をお憎みになる。今迄私は此感情を上手に抑へて誰からも怪しまれなかつたのです。あなたも人に悟られぬやうにして下さい。こんな私のやうな大きな愛であなたを包まうとして居る者は此世にない筈なのです。」

雨がすつかり止んで、竹が風に鳴つて居る上に月が出て居た。女房達は遠慮して遠くへ去つて居た。こんな機會は又と無いやうにも思はれ、抑制した事が口へ出て了つた後の興奮も手傳つて、都合よく著馴らした上著はそつと脱ぎ滑すのに音を立てなかつたから、其儘玉鬘の横へ寝た。玉鬘は情ない氣がした。人が何う云ふであらうと思ふと非常に悲しくなつた。實父の所

であれば愛は薄くてもこんな禍ひは無かつた筈であると思ふと、涙が零れて忍び切れなかつた。「そんなに私を恐れておいでになるのが恨めしい。馴染んでから長くなる私があるあなたと寝て、それが何の恐しい事です。たゞかうして私の戀の苦しみを一時的に慰めて貰はうとするだけです。」

源氏は尙も戀しい心をいろいろに物哀れな調子で告げて居た。かうして二人並んで身を横へて居ると、源氏の心は昔が蘇つた様にも思はれるのであるが、人も不審を起すであらうと思つて餘り夜も更さないで歸つて行つた。

「私は、唯歸つて來ない昔の戀人を悲しむ心を慰める爲めに、あなたを假りに其人として物を言ふかも知れませんが、あなたも假りに戀人の口吻で物を云つて下すつたらいゝのだ。」

と出がけに源氏はしんみりと云つた。玉鬘は茫となつて居て、恨めしさに何とも云はない。

「これほど寛大でないあなたとは思つて居なかつた。非常に憎むのですね。誰にも一切云はないで。」

源氏は嘆息をして、歸つた。玉鬘は年齢から云へば何ももう解つて居てよいのであるが、未だ男女の祕密と云ふものは何の程度のものかを知らなかつた。今夜の源氏の行爲以上のものがあると思はなかつたから、非常に不幸な身になつた様にも嘆いた。氣分も悪る相であつた。女房達は病氣かと心配して居た。

翌朝早く源氏から手紙が來た。身體が苦しくて玉鬘は寢て居たのであるが、女房達は硯などを出して來て返事を早くする様にと云ふ。玉鬘は手に取つて中を見ると、白い紙で表面は眞面目な書方のしてある手紙であつた。

「例もないやうに冷淡なあなたが恨めしかつた事を忘れない。

うちとけて寢も見ぬものを若草のことありがほに結ばほるらん

あなたは幼稚ですね。」

戀文であつてしかも親らしい言葉で書かれてある。玉鬘は憎惡を感じながらも、厚い檀紙にたゞ短く、

「拜見致しました。病氣をして居りますので失禮致します。」

と書いた。流石にはつきりとした女であると源氏は微笑された。一度口へ出した後は源氏が言寄る事も多くなり、玉鬘の身體の加減も悪くなつて行くやうであつた。少しでも世間へ此事が漏れたら何んなに嘲はれる事かと、薄倅な身を泣くばかりであつた。兵部卿の宮や右大將は自分等に姫君を與へてよい源氏の意向らしい事を聞いて、いよいよ熱心に求婚して來た。眞の事實を知らないのである。

螢

源氏の現在の地位は極めて重いが、もう廷臣としての繁忙も此處までは押寄せて來なかつた。源氏を信頼して來た戀人達にもそれぞれ安定を與へる事が出來た。

たゞ玉鬘だけは豫期せぬ煩悶をする身になつて居た。誰も想像する事の無い苦みを加へられて居る、それだけ又源氏への反感も大きかつた。母君さへ生きて居たらと又此悲みを新たにすゝる事になるのであつた。

源氏も打明けてからは一層苦しんで居るのであるが、人目を憚つて此事には觸れない。玉鬘の許へはよく出掛けた。そして傍に女房などの居ない時だけは、つと思はせられるやうな事を云つた。露はに退ける事もならず、玉鬘はたゞ氣の附かぬ風をして居た。人柄が明るい朗かな玉鬘であつたから自づと愛嬌も容れるばかりに出るので、兵部卿の宮などは夢中になる程戀をして居られた。そして確答も得ない中にもう不結婚月の五月にさへなつたと恨んでおいでになつた。もう少し近くへ伺ふ事を許して頂けたら私の惱む心を直接に洩らし度いと云ふ様な兵部卿の宮の手紙を讀んだ源氏は、

「宮の様な風流男のする戀は、近づかせて見るだけの價値はあるでせう。御返事を時々上げなさいよ。」

と、文章をかう書けとも教へるのであつた。しかし氣分が悪いからと玉鬘は書かうとしなかつた。此方の女房には貴族出のやうな者は餘り無かつた。唯、母君の叔父の宰相のくらゐであつた人の娘で、伶俐な女で不幸な境遇に居たのを迎へた宰相の君といふのは、字も美しく書き落付いた後見役も勤まる人であつたから、玉鬘が時々止むを得ぬ男への返事の代筆をさせて居た。その人を源氏は呼んで、口授して宮への返事を書かせた。

姫君は、源氏に戀を囁かれた時から、兵部卿の宮などからの手紙を少し興味を持つて眺める事があつた。其方へ心が動いて行くのでは無く、源氏の戀から逃れる爲めには兵部卿の宮に好意を持つ風を装ふのも一つの方法であると思ふのである。

源氏自身の興味からとは知らずに、思ひがけなく訪問を許すといふ返事をお得になつた宮は喜んで、目立たぬ風で訪ねてお出でになつた。妻戸の室に敷物を設けて、几帳だけの隔てゝ會

話になされる様にしてあり、心憎い程の空薫をさせたり、皆源氏の指圖からであつた。

夕闇時が過ぎて、暗く曇つた空をうしろに、しめやかな感じのする風采の宮が坐つて居られるのも艶であつた。奥の室から吹き通ふ薫香の香に源氏の衣服から散る香も混つて、宮のおいでになる邊りは匂ひに満ちて居た。豫期した以上の高雅な趣きの添つた女性らしく先づ宮はお思ひになつた。宮のお語りになる事は、じみな落付いた御希望であつて、情熱ばかりを見せようと遊ばすものでないのが優美に感ぜられた。源氏は興味を持つて此方で聞いて居た。姫君は東の室に引込んで横になつて居たが、宰相の君が宮のお言葉を持つて其方へ入つて行く時に源氏は言傳けた。

「餘りに重苦しい仕方です。入づてのお話などをなさる可きで無い。聲はお惜しみになつても、少しは近い所へ出なければいけません。」

といふ忠告であつた。なほかうして居れば、其用がある風をして傍へ寄つて來ないとは保證されない源氏であつたから、複雑な佗しさを感じ乍ら、玉鬘は其處を出て、中央の室の几帳へ

凭りかゝるやうな形で身を横へた。

宮の長いお言葉に對して返事がし難くて玉鬘が躊躇つて居る時、源氏は傍へ來て薄物の几帳の垂れを一枚だけ上へ上げたかと思ふと、蠟の燭を誰かゞ差出したかと思はれる様な光が邊りを照した。玉鬘は驚いた。夕方から用意して螢を薄様の紙へ澤山包ませて置いて居たのを、さり氣無く几帳を引繕ふ風をして俄かに袖から出したのであつた。忽ちに非常な光が傍に湧いた驚きに扇で顔を隠す玉鬘の姿が美しかつた。

強い明りが射したなら宮も中をお覗きになるであらう、自分の娘である點から美貌であらうとは想像して居られても、此れ程までに優れた人とはお考へにはなつて居られまい、好色なお心を遺瀨ないものにして見せよう、と源氏が計つた事である。源氏は其儘外の戸口から歸つて了つた。宮は、姫君の居る所が豫期したよりも近い所であつたから、興奮を遊ばし乍ら薄物の几帳の間から中を覗いておいでになつた時に、一室ほど離れた所に思ひがけない光が湧いたので面白くお思ひになつた。間もなく明りはうすれて了つたが、仄かな光に見えた稍大柄な姫君

の美しかった姿に宮のお心は十分に惹かれた。源氏の策は成功したのである。

鳴く聲も聞えぬ蟲の思ひだに人の消つには消ゆるものかは

「御實驗なすつたでせう。」

と宮はお云ひになつた。長く考へてからの返歌も何うかと思つて、玉鬘は直ぐ、

聲はせて身をのみこがす螢こそ云ふより勝る思ひなるらめ

とはかない風に云つたゞけで、又奥へ入つた。宮は疎々しい待遇を受けると云ふ様な恨みを述べて居られたが、餘り好色らしく思はれ度くなく、朝廷はおいでにならずに、軒の雫の冷くかゝるのに濡れて、暗い中に歸られた。

五日には馬場殿へ出る序でに又源氏は玉鬘を訪ねた。

「何うでしたか。宮はずつと遅くまでおいでになりましたか。際限なく宮を接近おさせしない様にませう。」

と宮の事を活かしもし殺しもし乍ら戒めるやうに云ふ源氏は若々しく美しかった。兵部卿の

宮からは手紙が来た。

今日さへや引く人もなき水隠れに生ふるあやめのねのみ泣かれん

長さが記録になる程の菖蒲の根に結び附けられて来たのである。源氏も女房達も返事を書く様に勧めるので、玉鬘自身も何ういふ譯も無く書く氣になつた。

あらはれていとゞ淺くも見ゆるかなあやめもわかず泣かれけるねの

とだけ仄かに書かれたらしい。今日は美しい薬玉などが方々から贈られて来た。

源氏は花散里夫人の所へも寄つて云つた。

「中將が左近衛府の勝負の後で、役所の者を皆伴れて来る相ですから、其用意をして置くのですね。未だ明るい中に來ませう。」

馬場殿は此方の廊から眺めるのに遠くはなかつた。

「若い人達は渡殿の戸を開けて見物するがよい。此頃の左近衛府には立派な下士官が居て一寸した殿上役人などは及ばないのが居ますよ。」

源氏の言葉に、女房達は今日の競技を見物出来るのを喜んだ。玉鬘の方からも童女などが見物に来て居て、廊の戸口には御簾が青やかに懸け渡され、華かな紫ぼかしの几帳がずつと立てられた所を、童女などが往來して居た。菖蒲重ねの柏、薄藍色の上着を著たのが西の對の童女であつた。下仕へは栲の花の色をばかしの裳に撫子色の服、若葉色の唐衣であつた。此方の童女は濃紫に撫子重ねの袷などで大やうな好みである。若い殿上役人などは見物の方に心を惹かれる様であつた。午後二時に源氏は馬場殿へ出た。豫想した通り親王方も大勢來られた。左右の組合せなどに宮中の定例の競技と違つて、中少將が皆入つて、かうした私の催しに却つて興味のあるものが見られた。女には何うして勝負が決るのか知らぬ事であつたが舍人までが艶な装束をして競技に走り廻るのを見るのが面白かつた。南御殿の横まで端は及んで居たから、紫夫人の方でも若い女房達が見物して居た。

「打球樂」「納蘇利」などの奏樂がある上に、右も左も勝つ度に歡呼に代つて樂聲を上げた。夜になつて終り、左近衛府の舍人達へはいろいろな纏頭が出た。來賓はずつと深更になつて退散

した。源氏は花散里の方に泊つた。

「兵部卿の宮は誰よりも御立派だ。御容貌などはよくないが、身の取りなしなど高雅な方だ。」

「あなたの弟様でもあの方の方が老けてお見えになりますね。私はずつと昔御所で隙見をして存じ上げて居ただけですから、今日お顔を見て其頃より綺麗におなりになつたと思ひました。」

夫人との間にこんな會話があつた。睦じくし乍ら夫人と源氏は別々な寢床に眠るのであつた。何時からかうなつて了つたのかと源氏は苦しい氣がした。六條院に華かな催しなどがあつても、平生夫人は人傳てに話を聞く位で済んで居るのを、今日は自身の所で會があつた事で非常な光榮に逢つた様に思つて居た。帳臺の中の床を源氏に譲つて、夫人は几帳を隔てた所で寢た。夫婦としての交渉などは最早不似合になつたとして居る人であつたから、源氏も強ひて其心を破る事もしなかつた。

梅雨が例年よりも長く續いて何時晴れるとも思はれない頃の退窟さに、六條院の人達も繪や小説を寫すのに没頭して居た。明石夫人はそんな才もあつたから、寫し上げた草紙などを姫君

へ贈つた。若い玉鬘は況して興味を小説に持ち、毎日寫しもし読みもする事に時を費して居た。かうした事の相手を勤めるに適した若い女房が何人も居た。數奇な女の運命が種々と書かれてある小説の中にも、事實か何うかは別として、自身の體驗した程の變つた事に逢つて居る人は無いと玉鬘は思つた。住吉の姫君が未だ運命に恵まれて居た頃は言ふまでも無いが、後にもなほ尊敬されて居る筈の身分であり乍ら今一步で卑しい主計頭の妻にされて了ふ所などを讀んでは、恐しかつた監の事が思はれた。源氏は何處の御殿にも近頃小説などが散らばつて居るのを見て玉鬘に言つた。

「厭な事ですね。眞實の語られて居る所は少ししか無いのだらうが、其れを承知で夢中になつて作中へ同化させられるばかりに、此暑い五月雨の日に髪かみの亂れるのも知らずに書き寫しをするのですね。」

などと源氏は笑つた。

「それにしても古い事の書いてある小説の中に、私程に眞面目な愚直過ぎる男の書いてあるも

のがありますか。又人間離れのした様な小説の姫君でも、あなたのように戀する男へ冷淡で知つて知らぬ顔をする様なのは無いでせう。だから有觸れた小説の型を破つた小説にあなたと私の事をさせませう。」

近々と寄つて來て源氏は玉鬘にかうさゝやいた。玉鬘は襟の中へ顔を引き入れる様にして云つた。

「小説におさせにならないでも、こんな奇怪な事は話になつて世間にひろまります。」

「珍らしい事だと云ふのですか。さうです。私の心は珍らしい事にときめく。」

ひたと寄り添つてこんな戯れを源氏は云つた。

思ひ餘り昔のあとを尋ぬれど親に背ける子ぞ類ひなき

「不孝は佛の道でも非常に悪い事にして説かれて居ます。」

玉鬘は顔を上げようとしなかつた。源氏は女の髪を撫で乍ら恨みを云つた。

古き跡を尋ぬれどげになかりけりこの世にかゝる親の心は

辛くもかう云ふ玉鬘たまかつらに、源氏は恥しい氣がして、それ以上の手出しは出来なかつた。
紫夫人も姫君に托して矢張り物語を集める一人であつた。「高麗野の物語」の繪になつて居るのを手に取つて、上手に出来た畫だと云ひ乍ら夫人は見て居た。小さい姫君が無邪氣な風に畫寢をして居るのが昔の自分のやうな氣がした。

「姫君の前でかうした男女關係の書かれた小説は讀んで聞かせない様にする方がいゝ。戀をし始めた娘などが悪い譯では無いが、世間にはこんな事があるのだと、普通の事のやうにそれと思つて了はれるのが危険ですから。」

こんな周到な注意が實子の姫君には拂はれて居るのである。

「空穂物語の藤原の君の姫君は重々しくて過失などは無さ相な性格ですが、餘り眞直ぐな線ばかりで、終ひまで女らしく書かれて無いのが悪いと思ふのですよ。」

と夫人が言ふと、

「現實の人でも其通りですよ。風變りな一本調子で押通して、いゝ加減に轉向する事を知らな

い人は可哀相だ。見識のある親が熱心に育てた娘が唯だ子供らしい所にだけ大事がられた跡が見えて、その他は何も出来ない様なのを見ては、何んな教育をしたのかと親まで輕蔑されるのが氣の毒ですよ。」

などと、源氏は姫君を完全な女性に仕上げる事に一生懸命であつた。繼母が意地悪をする小説も多かつたから、其反對な繼母の良さを見せ付ける氣がして夫人はそんなものを一切省いて、選擇し抜いたものだけを姫君の爲めに寫させたり繪に描かせたりした。

源氏は、中將を夫人の住居へは接近させなかつたが姫君の所へは出入りを許してあつた。自分が生きて居る間は異腹の兄弟も同じであるが、死んでからの事を思ふと早くから親しませて置く方が双方に愛情の出来る事であると思つて、姫君の方の南側の座敷の御簾あすの中へ来る事を許したのであるが、臺盤所の女房達の集つて居る方へ入る事は許して無かつた。源氏の爲めには唯二人だけの子であつた。中將は落著いた重々しい所のある性質であつたから安心して姫君の介添役をさせた。幼い雜遊びの場にもよく出會つて、中將は戀人と共に遊んだ年月がよく思

出された。

中將は若い女性達に戀の戯れを云ひかけても將來に希望を繋げる様な事は絶対にしなかつた。今でも緑の袖と辱められた人との關係だけを尊重して、其人以外の人を妻に擬して考へる事は不可能であつた。雲井の雁へは情を籠めた手紙を常に送り乍ら、表面は飽くまでも冷靜であつた。此態度を又雲井の雁の兄弟達は恨んで居た。

玉鬘たまがらに右近中將は深く戀をして、仲介役をするのは童女のみろこみろこだけであつたから、頼り無さに此中將を味方に頼んだ。

「人の事ではさう熱心になれない問題だから。」

などと左中將は冷淡に言つて居た。

内大臣は腹々に幾人もの子があつて、大人になつた子息達にはそれぞれの地位に就かせて居た。女の子は少かつた。後の競争に負けて失意の人になつて居る女御と、戀の過失をしてつた雲井の雁だけであつたから、大臣は残念がつて居た。此人は今も撫子なごしの歌を母親が詠んで來

た女の子を忘れなかつた。何うしたであらう、親の不名譽を思はずに卑しく零落をし乍ら自分の娘であると云つて居るのでは無からうか、それでもよいから出て來て欲しいと大臣は戀しがつて居た。子息達にも、

「若しさう云ふ事を云つて居る女が居たら、氣を付けて置いて呉れ。縦はたまたな戀愛も随分して來たが、その母である人は眞實に愛して居た人なのだが、何でも無い事で悲觀して、私に少い女の子一人を何處に居るか知れなくされて了つた。」

とよく話して居た。近頃は急に別れた女の子を思ふ様になつたのである。或夢を見た時、上手な夢占ひをする男を呼んで解かせて見ると、

「長い間忘れておいでになつたお子様で、人の子になつて居る方あなたのお知らせをお受けになると云ふ様な事は御座いませんか。」

と云つた。

「男は養子になるが、女はさうも行くもので無いから、何う云ふ事になつて居るのか。」

常
夏

と、それから時々内大臣は家で此事を話題にして居た。

炎暑の日に、源氏は東の釣殿へ出て涼んで居た。子息の中將と、親しい殿上役人も數人席に居た。桂川の鮎、加茂川の石臥いしだなどの魚を眼の前で調理させて賞味するのであつたが、例の様に又内大臣の子息達が中將を訪ねて來た。よくお出でになつたと、源氏は酒を勧めた。氷の水、水飯などを若い人は皆大騒ぎをして食べた。風はよく通るのであるが、晴れた空が西日になる頃には蟬の聲などからも苦しい熱が撒かれる様な氣がした。

「水の上の價値が少しも解らない暑さだ。私はこんな風にして失禮する。」

源氏は身體を横にした。

「こんな頃は音楽を聞かうと云ふ氣にもならないし困りますね。勤めに出る人達は堪らないでせう。帯も紐も解かれないのだからね。私の所だけでも氣樂にしたら何うですか。何か珍しい睡氣の醒めるやうな話はありませんか。」

などと源氏は云ふが、新しい話も無く皆長まつた風で涼しい高欄に背を押付けたまゝ黙つて居た。

「誰から聞いたのであつたか、あなたの方の大臣が此頃外でお生れになつたお嬢様を引取つて大事にして居られるといふ事を聞きましたが眞實ですか。」

と源氏は辨の少將に問うた。

「世間で申す程大層な事でも御座いません。此春大臣が夢占ひをさせました事が噂になり、それからひよつくりと自分は縁故のある者と名乗つて出て來ましたのを、中將が眞偽を調べまして、それから引取つて來た様です。たゞ大臣の尊嚴がどれだけそれで損はれましたか知れません。」

「澤山の雁の列から離れた一羽までも強ひてお捜しになつたのが少し欲深かつたのでせうが、私の所なども、子供が少いのだから、そんな女の子も見付けたいのだが。」

と源氏は微笑した。子息の左中將も眞相を委しく聞いて居たのでこれも笑ひを洩らさないで居られなかつた。辨の少將と藤侍従は辛さうであつた。

「朝臣あそん、お前は其落葉でも拾つたらいいだらう。不名譽な失戀者になるよりは、同じ姉妹なの

だからそれで満足したらいいのだよ。」

源氏は子息をからかふ様に云つた。内大臣と源氏は大體仲の良い親友なのであるが、ずつと前から性格の相違から僅かな感情の隔りはあつたし、此頃は又中將を侮蔑して失戀の苦しみをさせて居る大臣の態度に飽き足りない物があつた。大臣の性質から、近頃引取つた娘に失望を感じて居る様子は想像出来るし、又突然に此玉鬘を見せた時の歡び振りも、源氏には思はれな

いでもなかつた。夕に移る頃の風が涼しくて若い公達は皆此處を立去り難く思ふ風であつた。

「氣樂に涼んで行つたらいいでせう。私も青年達から煙たがられる年になつて了つた。」

源氏はかう云つて、近い西の對を訪ねようとして居たから、公子達は皆見送りの爲めに從いて行つた。日の暮れ時の仄暗い光線の中では、同じ様な直衣姿の誰が誰かもよく解らなかつたが、源氏は玉鬘に少し外へ来て御覽なさいと云つて、青年達の居る方を覗かせた。

「少將や侍從を伴れて來ましたよ。此處へは走り寄り度い程の好奇心を持つ青年達なのですが、中將が生眞面目過ぎて伴れて來ないのですよ。同情の無い事です。」

と源氏は囁いて居た。庭には、たゞ美しい撫子ばかりを、唐撫子、大和撫子も殊に優れたのを選んで、低く作つた垣に添へて植ゑてあるのが夕映に光つて見えた。公子達は其前を歩いてちつと心が惹かれる様に佇んだりもして居た。

「立派な青年官吏ばかりですよ。今日は見えないが右中將は年かさだけあつて又優雅さは格別ですよ。何うです、あれから後も手紙を送つて遣しますか。」

などと源氏は言つた。此公達の中でも源中將は目立つて艶な姿に見えた。

「中將を嫌ふ事は内大臣として意を得ない事です。御自分が尊貴であればあの子も同じ兄妹から生れた尊貴な血筋と云ふものなのだからね。然し餘り系統がきちんとして居て、王風の點が氣に入らないのですかね。」

と源氏は云つた。

「來まさば（おほきみ來ませ塔にせん）と云ふ様な人も彼處にはあるのでは御座いませんか。」
「いや、何も塔に取られ度いではありませんがね。若い二人が作つた夢を壊した儘にして幾

年も置いておかれるのは惨酷だと思ふのです。未だ官位が低くて世間體がよろしく無いと思はれるのなら、公然の事にはしないで私へお嬢様を托して置かれるといふ形式でもいゝではありませんか。私が責任を持ってばいゝ筈だと思ふのだが。

源氏は歎息した。自分の實父との間にはかうした感情の疏隔があるのか、此が支障になつて親に逢ひ得る日も未だ遙かな事に思はねばならないのかと、玉鬘は悲しく思つた。月が無いので燈籠に灯が點じられた。

「灯が近過ぎて暑苦しい。篝の方がよからう。」

と源氏は命じた。和琴が其處に出て居たので、引寄せて鳴らして見ると律の調子に合わせてあつた。源氏は少し弾いた。

「こんな趣味を持つては居られないのかと、失禮な推測をして居ました。秋の涼しい月夜などに蟲の音に合せる程の氣持ちでは是れの弾かれるのは華かでないゝものです。これは難しい楽器です。現在では内大臣が第一の名手です。たゞ清掻をされるのにも凡る樂器の音を含んだ聲が立

ちますよ。」

と源氏は云つた。玉鬘も其事は豫てから聞知つて居た。何うかして父の大臣の爪音に接し度いとは以前から願つて居た事であつた。

「此方に居りまして、音樂のお遊びが御座います時などに聞く事が出来ますでせうか。」

「あづま琴などとも云つて、輕蔑して云はれて居る琴の様ですが、宮中の御遊の時に圖書の役人に樂器の搬入を命ぜられるのにも、先づ大和琴が眞先です。お父様も私の家などへも御出でにならない事ありませんが精一杯に弾かれるのを聞く事は難しいでせう。名人の藝といふものは容易には全部を見せようとしませんからね。併しあなたは何時か聞けますよ。」

源氏は少し弾いた。華かな音であつた。これ以上の音が父には出るのであらうかと、玉鬘は不思議にも思ひ乍ら父を憶れて居た。

「さあ弾いて御覽なさい。藝事は人に恥ぢて居ては進歩しません。「想夫戀」だけはきまりが悪いかも知れませんが。」

かう源氏に勧められても、玉鬘は手を出さうとしなかつた。源氏が弾くのを少し長く聞いて居れば得る所があらう、九州の田舎で習つただけの自分であるから、少しでも長く弾いて欲しいと思ふのであつた。何時となく源氏の方へ膝行り寄つて居た。

「不思議な風が出て来て琴の響を引立てて居るやうです。」

と首を傾けて居る玉鬘の様子が灯の明りに美しく見えた。源氏は和琴を押しやつた。女房達が近くに居るので、例のやうな戯談も源氏は云へなかつた。

「撫子を十分に見ずに青年達は行つて了りましたね。大臣にも此花壇をお見せし度い。無常の世なので、すべき事は速かにしなければいけない。昔大臣が話の序にあなたの話をされたのも今の事のやうな氣がします。」

なでしこの常なつかしき色を見ばもとの垣根を人や尋ねん

私にはあなたのお母様の事で疚しい點があつて、それでつい報告して上げるのが遅れて了ふのです。」

玉鬘は泣いて、はかない風に言つた。

山がつの垣ほに生ひし撫子のもとの根ざしを誰か尋ねん

その若々しい様子に、源氏は苦しい程に戀しくなつた。到底この戀心は抑制して了ふ事の出来るものでない事を知つた。

玉鬘の西の對への訪問が餘りに續いて人目を引き相な時は、源氏も心の鬼に咎められて置くが、そんな時には何かと用事を拵へて手紙を送つた。此人の事だけが毎日の心に懸つて居た。何んなに深く愛して居ても春の女王と同じに思ふ事の不可能なのは自分でも知つて居た。第二の妻である事に由つて幸福があらうとは思はれない、兵部卿の宮か右大將に結婚を許さうか、さうして了へば自分も此惱ましきから救はれよう、消極的な考へではあるが其方法を取らうかと思ふ時があつた。併し西の對へ行つて美しい玉鬘を見たり、琴を教へたりして近々と寄つたりしては決心もぐらつた。玉鬘も一時は恐ろしくも思つた源氏が、其以上の事は無くて矢張り頼もしく思はれて、強ひて源氏の愛撫から遁れようとしなかつた。

今の儘に自分の手許へ置いて結婚をさせる事にしよう、そして自分の戀人にして置かう、處女である點が自分に躊躇をさせるのであるが結婚をした後の此人に深い愛を以て臨めば、良人のある事などは問題でなく戀は成立つに相違ない、と怪しからぬ事も源氏は思つた。

内大臣が娘だと名乗つて出た女を直ちに自邸へ引取つた處置に就いて、家族なども世間も輕率な誤つた仕方だと云つてゐる事も皆大臣の耳には入つて居た。辨の少將が話の序に源氏から事實かと問かれた事を言ひ出した時大臣は笑つて言つた。

「さうだ、彼處にも今迄噂も聞いた事の無い外腹の令嬢が出来て、大層に扱つて居られるでは無いか。餘り他人の事を言はぬ大臣だが不思議に私の家の事といふと口の悪い批評をされる。」
 「彼方の西の對の姫君は餘り缺點も無い人らしい御座います。兵部卿の宮などは熱心に結婚したがつていらつしやいますから。」

「さあ、それがね、源氏の大臣の令嬢である點でだけ有難く思はれるのだらう。世間の人心と云ふものは皆其れなのだ。劣り腹と云つても明石の女の生んだ人は不思議な因縁で生れたと云

ふ事だけでも何と無く未來の幸運が想像されるが、新しい令嬢は何うかすると其れは實子で無いかも知れない。」

と内大臣は玉鬘を貶した。それにしても兵部卿の宮が結局勝利を得て塔に決るだらう、大臣の趣味ともよく一致した風流人だから、と云つた後で、大臣は雲井の雁の事が残念に思はれた。誰と結婚するか世間に興味を持たれる娘に仕立て損ねたのが口惜しかった。これに由つても中將が今一段光彩のある官に上らない中は結婚が許されないと大臣は思つた。こんな事を考へて居た大臣は急に雲井の雁を訪ねたくなつて、少將も供をした。

雲井の雁は丁度晝寢をして居た。薄物の單衣を着て横はつて居る姿からは暑い感じを受けなかつた。可憐な小柄な姫君である。透いて見える肌の色が綺麗であつた。美しい手つきをして扇を持ち乍ら其腋を枕にして居た。横に溜つた髪は左程多くも長くも無いが、端の方が美しかった。女房達も几帳の蔭で晝寢をして居たので、大臣の來た事は姫君は知らなかつた。父が扇を鳴らす音に何氣なく見上げた顔つきが可憐で、頬の紅くなつて居るのも、親の眼には非常に

美しく見えた。

「うたゝねはいけません。女房なども近くに附いてゐないで怪しからん。女と云ふものは始終自身を護る心がなければ不可いない。あなたをかうして上げ度いと種々いんご思つて居た事は空想になつて了つたが、私はそれでもあなたを世間から笑はれる人にはしたく無い。」

とも可愛く思ひ乍ら誠めもした。昔は何も深くは考へる事が出来ずに、あの騒ぎのあつた時も恥知らずに平氣で父に對して居たと思出すだけでも胸が塞る様に雲井の雁は思つた。大官の所からは始終逢ひ度いと云ふ風にお手紙が來るのであるが、大臣が氣に懸けて居る事を思ふと御訪問も容易に出来ないのである。

大臣は此の對たいに住ませてある令嬢を何うすれば好いか、又人が譏るからと云つて家へ送り歸すのも輕率な氣がするが、娘らしくさして置いて満足して居るらしく自分が誤解されるのも厭であるし、女御の所へ來させよう、と決めた。大臣は女御に、

「あの娘をあなたの所へ遣す事にしよう。悪い所は年の行つた女房などに遠慮無く矯正させて

使つて下さい。若い女房などが何を云つてもあなただけでは屹度無いと思ひます。此方へ來ましてから種々お置きなさい。」

と笑ひ乍ら云つた。

「誰が何う云つても、そんなつまらない人では屹度無いと思ひます。此方へ來ましてから種々取沙汰をされて、一つはそれで逆上のぼせて粗相な事もするので御座いませう。」

女御は貴女らしく、一つ一つ取立てゝ美しいと云ふ事の出来ない顔で、そして品のよい澄み切つた美の備つた、半開なかほいた梅の花を朝の光に見るやうな奥床しさを見せて微笑して居た。

「併し何と云つても中將の無經驗がさせた失敗だ。」

などと父に云はれて居る新令嬢は氣の毒である。大臣はその人の所へも行つて見た。座敷の御簾みすを一杯に張出す様にして裾を押へた中で、五節といふ生意氣な若い女房と令嬢は双六を打つて居た。

「せうさい、せうさい。」

と両手を摺り摺り賽を撒く時の呪文を早口に唱へて居るのに悪寒を覚え乍らも、大臣は従つて来た人達の人拂の聲を手で制して、猶も妻戸の細目に開いた隙から、障子の向ふを覗いて居た。五節も蓮葉らしく騒いで居た。

「御返報しますよ、御返報しますよ。」

賽の筒を手でひねり乍ら、直ぐには撒かうとしない。姫君の容貌は、一寸人好きのする愛嬌のある顔で、髪も美しいが、額の狭いのと頓狂な聲とに損はれて居た。美人では無いが此娘の顔に、鏡で知つて居る自身の顔と共通したものゝあるのを見て、大臣は運に呪はれて居る気がした。

「此方で暮らす様になつて、何か氣に入らぬ事がありますか。つい忙しくて訪ねて来る事も十分出来ないが。」

「何の不足があるもので御座いますか。お顔を始終拜見出来ませんだけは成功したものは思はれませんが。」

新令嬢は例の調子で云つた。

「さうだ、私も傍で手足の代りに使ふ者も餘り無いのだから、あなたが来たならそんな用でもして貰ひ度いと思つて居たが、矢張りさうも行かない。たゞの女房は、多少身分の高下はあつても皆一緒に用事をして居ては目立たずに済んで氣安いものだが、それでも誰の娘などといふ事が知れて居る程の身の上の者は、親兄弟の名譽を傷る様な事も自然起つて来て面白くないものだらうが、まして……」

と云ひさして話を止めた父の自尊心などに令嬢は頓著して居なかつた。

「いゝえ、關ひませんとも。令嬢だなどと思召さないでお使ひ下さいまし。お便器の方のお仕事だつて致しますから。」

「それは餘りに不似合な役でせう。偶ま巡合つた親に孝行をして呉れる心があるなら、其物言ひを少し静かにして下さい。それが出来れば私の命も延びるだらう。」

道化た事を云ふのが好きな大臣は笑つた。

「私の舌の性質なのです。妙法寺の別當の坊様が私の生れる時産屋うぶやに居たので、其方またにあやかつたのだと云つて母も歎息して居りました。」

「災難なのだね。其坊様の持つて居る罪の報いに違ひない。」

子乍らも女御の許へ遣るのは恥しい、何故此人を引取つたらう、人中へ出せば愈々悪評がそれからそれへと傳へられる事と思ふと、大臣は計畫を捨てる氣にもなつたが、又、

「女御が家へ歸つておいでになる間に、あなたは時々彼方へ行つて、種々いろいろな事を見習ふといふと思ひます。」

と云つた。

「まあ嬉しい。私は何うかして皆様から兄弟だと認めて頂きたいと寝ても醒めても祈つて居ります。女御様の爲めに私は水を汲んだり運んだりしましてもお仕へ致します。」

憂鬱を紛らすために、大臣は云つた。

「そんな必要も無いからお行きなさい。あやかつた坊様は成る可く遠方へ遣つて置いて。」

「それでは何時参りませう。」

「さう、吉日でなければならぬかね。何、いゝよ、大層に考へずとも、行きたければ今日でも。」

と云ひ捨て、大臣は出て行つた。四位五位の官人が多く後に従つた。權勢の強さの思はれる父君を見送つて、令嬢は云つた。

「御立派なお父様だこと。あんな方の胤なのに、随分小さい家で私は育つたこと。」

乳母の懐育ちの儘で、何の教養も加へられて居ない新令嬢の眞價は、外觀から誤られもするのであつた。さう頭腦も悪いのでも無かつた。三十一字の首尾の一貫しない様な歌を早く作つて見せる位の才もあつた。

「女御様の所へ行けとお云ひになつたのだから、私が澁々と氣が進まない風に見えても感情をお害ねになるだらうから、私は今夜の中に出掛ける事にします。」

さう云つて手紙を先に書いた。青色紙一重ねに漢字勝ちに書かれてあつた。肩が怒つて、

しかも漂つて見える力の無い字で、「し」の字が長く氣取つて書いてあつた。一行一行が曲つて倒れ相なのを満足相に微笑し乍ら讀返した後で、流石に小さく細く巻いて撫子の花へ附けた。廁係りの童女が使になつて女御の臺盤所へ竊つと出した。下仕への女が顔を見知つて居て、撫子を受取つた。

女御は微笑し乍ら下へ置いた手紙を中納言と云ふ女房が傍から少し讀んだ。

「漢字は見つけない所爲かしら、前後が一貫して居ない様に思はれる手紙よ。返事もそんな風にならぬ書かないでは低級だと云つて輕蔑されるだらうね。あなたから書いてお遣り。」

と女御は手紙を渡して云つた。若い女房は皆聲を立てないが笑つて居た。

ひたちなる駿河の海の須磨の浦に浪立ちいでよ箱崎の松

返事を中納言が書いて讀むのを聞いて、自身が云つた様に人が思ひはせぬかと、困つた様な顔をした。

「大丈夫で御座いますよ。聞いた人が判断致しますよ。」

と中納言は、其まゝ包んで出した。新令嬢はそれを見て、

「うまいお歌だこと。まつとお云ひになつたのだから。」

と、甘い香ひの薫香を熱心に着物へ焚き込んで居た。紅を赤々と附けて、髪を綺麗に撫でつけた姿には賑かな愛嬌があつた。

篝

火

此頃世間では内大臣の新令嬢と云ふ言葉を何かにつけて言ふのを源氏の大臣は聞いて、

「兎も角も深窓に置かれる娘を、最初は大騒ぎもして迎へて置き乍ら、今では世間へ笑ひの材料に提供してゐる様な大臣の氣持が理解出来ない。自尊心の強い性質から、外で育つた娘の出來のよし悪しも考へずに呼寄せた後で、氣に入らない不愉快さを、さうした侮辱的な扱ひで紛らして居るのであらう。周囲の人が愛で繕へば、實質は兎も角も、世間體をよくする事も出来るのだが。」

と、愛されない令嬢に同情して居た。そんな事も聞いて玉鬘は、親であつても何んな性格か知らずに接近して行つては恥しい目に會ふ事が自分にも思はれないと感じた。右近も同じ考へであつた。

秋になつた。初風が涼しく吹いて身に沁む思ひのそゝられる時であるから、戀しい玉鬘の所へ源氏は始終來て、一日を其處で暮す様な事もあつた。琴を教へたりもした。五六日頃の夕月は早く落ちて了つて、涼しい色の曇つた空の下では萩の葉が哀れに鳴つて居た。琴を枕にして

源氏と玉鬘は並んで假寝をして居た。こんなみじめな境地は無からうと源氏は歎息し乍ら夜更しをして居たが、人が怪しむ事を憚つて歸らうとした。前の庭の篝が少し消えかゝつて居るのを、從いて來て居た右近衛の丞に命じて更に燃やさせた。涼しい流の所に面白い形に擴がつた檀の木の下に篝は燃え初めた。座敷の方へは丁度涼しい程の明りがさして、女の美しさが浮き出して見えた。髪の手觸りの冷い事なども艶であつた。源氏は立去る氣になれなかつた。

「始終此方を見廻つて篝を絶やさぬ様にするがいゝ。暑い頃、月の無い間は庭に光の無いのは氣味の悪いものだから。」

と右近の丞に言つて居た。

篝火に立ち添ふ戀の煙こそ世には絶えせぬ焰なりけれ

「何時まで此状態であるなければならぬのでせう。苦しい下燃えと云ふものですよ。」

玉鬘にはかう云つた。女は又奇怪な事が囁かれると思つて、

行方なき空に消ちてよかゞり火にたよりにたぐふ煙とならば

「人が不思議に思ひます。」

と云つた。源氏は困つた様に見えた。歸らうと源氏が御簾から出る時に、東の對の方に上手な笛が十三絃の琴に合せて鳴つて居るのが聞えた。始終中將と一所に遊んで居る公達のすさびであつた。

「頭の中將に違ひない。上手な笛の音だ。」

源氏は其儘留つて了つた。東の對へ人を遣つて、今此方に居ます、篝の明りの涼しいのに引止められてです、と云はせると三人の公達が此方へ來た。

「風の音秋になりにけりと聞える笛が私をそゝのかした。」

琴を出させて、源氏は弾いた。源中將は盤渉調に笛を吹いた。頭の中將は暗れがましがつて合奏の中へ入らうとしないので、遅いね、と源氏は促した。弟の辨の少將が拍子を打出して低音に歌ひ始めた聲が鈴虫の音の様であつた。二度繰返して歌はせた後で、源氏は和琴を頭の中將へ譲つた。名手である父の大臣にもあまり劣らずに中將は巧みに弾いた。

「御簾の中に琴の音をよく聞分ける人が居る筈なのです。今夜は私への杯は餘りさゝないやうにして欲しい。青春を失つた者は、酔泣きと一所に過去の追憶が多くなつて取亂す事になるだらうから。」

源氏の言葉を姫君も身に沁んで聞いた。兄弟の縁のある此人達に特別の注意の拂はれて居るのを、頭の中將も辨の少將も夢にも知らなかつた。中將は堪へ難い戀を音楽に托して思ふ存分に琴を搔鳴らし度い心を靜かに抑へて、控目な弾方をして居た。

野

分

中宮のお住居の庭へ植ゑられた秋草は、今年は殊に種類も多く、其中へ風流な黒木、赤木のませ垣が所々に結はれ、朝露夕露の置き渡す頃の優美な野の景色を見ては、春の山も忘れる程に面白かつた。

中宮は是れにお心が惹かれてずつと御實家の生活を續けておいでになつた。音楽の會の催しがあつてもよい譯ではあつたが、八月は父君の前皇太子の御忌月であつたから憚られてお暮らしになる中に草の花は盛りになつて行つた。今年の野分の風は例年よりも強い勢で空の色も變る程に吹き出した。露の吹き散らされて無慘に亂れて行く秋草を御覽になる宮は、御病氣にもおなりにならぬかと思はれる程の御心痛を遊ばされた。掩ふばかりの袖といふものは春の櫻によりも實際は秋空の前に必要なものかと思はれた。

日が暮れるに従つて、虚げられる草木の影は見えずに風の音ばかり募つて來るのも恐しかつたが、格子なども皆下して了つたので、宮はたゞ草の花を哀れにお思ひになるより外仕方もおりにならなかつた。

南の御殿も前の庭を修理させた直後であつたから、此野分に、もとあらの小萩が奔放に枝を振亂すのを傍觀して居るよりほかはなかつた。枝が折られて露の宿ともなれない風の秋草を女王は縁の近くに出て眺めて居た。源氏は小姫君の所に居た頃であつたが、中將が來て東の渡殿の衝立の上から妻戸の開いた中を何心無く見ると女房が大勢居た。中將は立止つて音をさせぬやうにして覗いて居た。屏風なども風の烈しい爲めに皆疊み寄せてあつたからずつと先の方もよく見えるのであるが、其處の縁付きの座敷に居る一女性が中將の目に入つた。女房達と混同して見える姿ではない。氣高くて、さつと匂ひの立つ氣がして、春の曙の霞の中から美しい樺櫻の咲き亂れたのを見出した様な氣がした。曾て見た事の無い麗人である。御簾の吹上げられるのを、女房達が抑へ歩くのを見乍ら、何うしたのか其人が笑つた。非常に美しかつた。草花に同情して奥へ入らずに紫の女王が居たのであつた。

父の大臣が自分に接近する機會を與へないのは、男性が見れば平靜であり得なくなる美貌の繼母と、自分とを、聰明な父は隔離するやうにして親ませなかつたのであると思ふと、中將は

自身の隙見の罪が恐ろしくなつた。そして立去らうとする時、源氏は西側の襖子を開けて夫人の居間に入つて来た。

「厭な日だ。あわたゞしい風だね。格子を皆下して了ふが好い。」

と源氏が言ふのを聞いて、中將は又元の場所へ寄つて覗いた。女王は何か物を云つて居て源氏も微笑し乍ら其顔を見て居た。親と云ふ氣のしない程源氏は若くて、美しい男の盛りの様に見えた。女の美も亦完成の域に達した時であらうと身に沁む程に中將は思ったが、此東側の格子も風に吹散らされて、立つて居る所が中から見え相になつたので身を退けた。そして今来た様に吹拂ひなどをし乍ら南の縁の方へ歩いて出た。

「だから私が云つた様に不用心だつたのだ。」

源氏が始めて東の妻戸の開いて居た事を見出した。家司達が出て来て、

「大變な風で御座います。北東から来るので此方は幾分か宜しい譯で御座います。馬場殿と南の釣殿などは危険に思はれます。」

などと主人に報告して、下人に種々命じて居た。

「中將は何處から来たか。」

「三條の宮に居りましたが、風が強くなり相だと人が申すので、心配で此方へ出て参りました。彼方ではお一方きりなのですから心細さうなのでお氣の毒に存じて又彼方へ参らうと思ひます。」

「眞實にさうだ。早く行くがいゝね。」

源氏は大宮に御同情して居た。

「騒がしい天氣なので如何かとお案じ申上げて居りますが、此朝臣がお付きして居るので安心してお伺ひは致しません。」

と云ふ挨拶を言傳けた。宮は中將が来たので力を得た様にお喜びになつた。宮は、

「年寄りの私が未だこれ迄に経験しない程の野分ですよ。」

と慄へておいでになつた。大木の枝の折れる音が凄かつた。家々の瓦の飛ぶ中を来たのは買

險であつたとも宮は言はれた。華かな御生活も皆過去の事になつて、今でも世間から受けて居られる尊敬が薄らいだ譯では無いが、却つてお一人子の内大臣の取る態度に温かさの缺けた所があつた。

夜通し吹續ける風に眠り得ない中將は、物哀れな氣持ちになつて居た。今日は戀人の事が思はずに、初めて見た繼母の女王の面影が忘れられなかつた。大それた罪を心で犯す事になるではないかと反省しようと思つたが、又同じ幻が目に見えた。

あれ程の夫人の居られる中へ東の夫人の混つて居られるといふ事などは想像も出来ない事である、東の夫人が可哀想であるとも中將は思つた。父の大臣の立派な性格がそれに依つても證明された氣もした。眞面目な中將は、紫の女王を戀の對照とは考へないが、自分もあゝした妻が欲しい、短い人生もあゝした人と一所ならば長からうにと、思ひ續けて居た。

明方に風が少し濕氣を帯びた重い音になつて、村雨風な雨になつた。六條院では離れた建物が皆倒れた相だなどと報せがあつた。風が揉み抜いて居る間、廣い六條院も大臣の住居邊は大

勢の人も詰めて居たらうが、東の町などは人少なくて花散里夫人は心細かつた事であらうと、中將は驚いて未だほのぼの白む頃に三條の宮から訪ねて行つた。横雨が冷かに車へ吹込んで来て、空の色も妻い道を行き乍らも中將は魂が何となく身に添はぬ氣がした。又自分には物思ひが一つ殖える事になつたのかと慄然とした。

六條院へ著くと中將は直ぐに東の夫人を見舞つた。非常におびえて居た花散里夫人を種々慰めてから、家司を呼んで破損した所の修繕などを命じた。それから南の町へ行つた。格子は未だ上げられずに人も起きて居なかつた。中將は源氏の寢室の前に當る高欄に凭りかゝつて庭を眺めて居た。草むらも亂れ、檜や瓦も飛び散つて、立じとみなども數しれず倒れて居た。僅かだけ漏れた日光に恨み顔な草の露がきらきらと光つて居た。空は凄く曇つて霧に掩はれて居るのである。

中將は何といふ事無しに涙の零れるのを押込む様に拭いて、咳拂ひを試してみた。中將が来て居るらしい、未だ早いだらうに、と云つて源氏は起きた。何か夫人が云つて居るらしいが聲は

聞えず、源氏の笑ふのが聞えた。

「昔もあなたに経験させた事の無い夜明けの別れを、今初めて知つて寂しいのでせう。」

女王の言葉は聞えないのであるが、かうした戯れを言ひ合ふ今も緊張した間柄である事が推察された。格子を源氏が手づから上げるのを見て、餘り近くに居るのもと、中將は少し後へ退いた。

「何うだつたか、宮様はお喜びになつたかね。」

「はい。何でも無い事にもお泣きになりますからお氣の毒で。」

源氏は笑つた。

「もう長くはいらつしやらないだらう。誠意を籠めてお仕へして置くがよい。内大臣は情味を以て何うしてお上げしようと云ふ様な事の出来ない人だから。複雑な性格で、非常に聰明な、末世の大臣に過ぎた力量の人だがね。」

それから源氏は、中宮の許へ、

「昨晚の風のきつい頃は何うしておいでになりましたか。私は少し身體の調子が宜しく無く、伺ひ兼ねます。」

といふ挨拶を中將に持たせて遣つた。廊の戸を通つて中宮の町へ出て行く若い中將の姿が美しかった。東の對の南側の縁に立つて、中央の寢殿を見ると、格子が二間ほどだけ上げられて未だ仄かな朝ぼらけに御簾を卷上げて女房が出て居た。中宮は童女を庭へ下して虫籠に露を入れさせて居られた。紫苑色、撫子色などの濃い色、淡い色の袖に、女郎花色の薄物の上著などを著て、四五人づゝ一團りになつて彼方此方の草むらへ籠を持つて行き乍ら、折れた撫子なども取つて来る。霧の中にそれが見えた。座敷を通つて吹く風は侍従香の匂を含んで居た。

中將が靜かに歩いて行くと、女房達はひどく驚いた風も見せずに皆座敷へ入つて了つた。宮の御入内の時に童形で供奉して以來知合ひの女房が多くて中將には親しみのある場所であつた。源氏の挨拶を申上げてから、宰相の君、内侍なども居るのを知つて中將は暫く話して居た。其處の清い氣分の中で女房達と語り乍らも、中將は昨日以來の惱しさを忘れる事が出来な

かつた。

歸つて來ると、南御殿は格子が皆上げられてあつて、夫人は昨夜氣づかひ乍ら寝た草花の所
在も知れぬ程に亂れて了つたのを眺めて居る時であつた。中將は階段の所へ行つて、中宮の御
返辭を報じた。それは、

「荒い風をお防ぎ下さいませうと若々しく頼みに致して居りますので、お見舞を頂きまし
て初めて安心致しました。」

といふのであつた。

「弱々しい宮様なのだから、さうだつたらう。實際不親切に思召したであらう。」

源氏は直ぐに御訪問する事にした。直衣などを着る爲めに向ふの室の御簾を引上げて源氏が
入る時に、短い几帳を近くへ寄せて立てた人の袖口が見えた。女王であらうと思ふと中將の胸
が湧上るやうな音を立てた。源氏は鏡に向ひ乍ら小聲で夫人に云つた。

「中將の朝の姿は綺麗ではありませんか。親の欲眼かしらん」

御簾から出ようとしたが、源氏は、中將が一方を見詰めてゐて源氏の來る事にも氣が付かぬ
様子であるのを何う見たのか、引返して來て夫人に、

「昨夜風の紛れに中將はあなたを見たのでは無からうか。戸が開いて居たでせう。」

と云つた。夫人は顔を赤くした。

「そんな事。渡殿の方には人の足音がしませんでしたもの。」

「然し疑はしい。」

源氏は獨言を云ひ乍ら中宮の御殿の方へ歩いて行つた。中將も供をした。

源氏は又北へ通つて明石の君の町へも廻つた。此處では下仕への女中などが亂れた草の庭へ
出て花の仕末をして居た。童女が、夫人の愛して居る龍膽や朝顔が外の草の中に混つて了つた
のを選び出してはつて居た。明石は十三絃の琴を弾き乍ら縁に近い所へ出て居たが、人拂
の聲に平常著の上へ棹から下した小掛を掛けて出迎へた。

おほかたの荻の葉過ぐる風の音もうき身一つに沁むこゝちして

と、風の見舞ひだけを云つて冷淡に歸つて行つた源氏を恨み乍ら、女は口誦んで居た。

源氏が東の町の西の對へ行つた時は、夜の風が恐くて明方まで眠れず、その爲めに寝過ぎた玉鬘が鏡を見て居る時であつた。先拂ひの聲も立てさせずに窺つと源氏は座敷へ入つた。屏風なども皆疊んであつて、混雜した室内へ華かな秋の日射しが入つた所に玉鬘は坐つて居た。

源氏は近くへ席を定めた。荒い野分の風も此處では戀を告げる方便に使はれた。

「そんな事を云つて私をお困らせになりますから、私は風に吹かれて行つて了ひ度く思ひました。」

玉鬘は機嫌を損ねて云つた。源氏は笑つた。

「何處か吹かれて行きたい所があるのでせう。私を愛さない事も明かにする様になりましたね。尤もですよ。」

誤解され易い言葉であつたと、自分ながら可笑しく、玉鬘は笑つた。顔色も華かに見え、海酸漿のやうにふつくりと美しかつた。たゞ目が大き過ぎるのが缺點であつた。中將は父の源氏

が緩りと話して居る間、此異腹の姉の顔を一度見度いと平生から思つて居たので、隅の部屋の御簾が几帳も添へてあるが亂れた儘になつて居る其の端をそつと上げて見た。中央の部屋との間の邪魔物もなく片付けてあつたからよく見えた。源氏は戯れて居る様であつた。柱の方へ身を少し隠す様に姫君がして居るのを、源氏は自身の方へ引寄せて居た。髪の毛が寄つてはらはらと零れかゝつた。女も困つた風はし乍らも、さすがに柔かに寄り懸つて居た。始終此馴々しい場面の演ぜられる事も中將には合點された。自分の娘に對して好色な、あさましいことと、真相を知らぬ中將は惡寒を覺えた。中將は、玉鬘の華な容色に、八重の山吹の咲亂れた盛りに露を帯びて夕映の下にあつた事を思ひ出した。

やがて、何うしたのか源氏が眞面目な顔をして立上つた。玉鬘は、

吹き亂る風のけしきに女郎花萎れしぬべきこゝちこそすれ

と云つたのが、源氏が口にした時に中將に聞えたのであつた。中將は見付けられるのを憚つて其處から退いた。源氏が、

しら露に靡かましかば女郎花荒き風にはしをれざらまし
 「弱竹をお手本になさい。」

と云つたと思つたのは、中將の僻耳であつたかも知れない。

花散里の所へ其處から直ぐに源氏は行つた。今朝の肌寒さに促された様に、年をとつた女房達が夫人の座敷で裁物などをして居た。細櫃の上で眞綿を擴げてゐる若い女房もあつた。朽葉色の薄物、淡紫の打ち絹などが散らかつて居た。

「中將の下襲ねですか。御所の壺前裁の秋草の宴なども今年は駄目になるでせう、こんなに風が吹出してつては。」

何になるのか染物や織物が美しく集められて居るのを見乍ら、源氏は、南の女王にも劣らず巧みに見立てる人だと花散里を思つた。源氏の直衣の材料の支那の紋綾を初秋の草花から摘んで作つた染料で手染めにしたのが非常によい色であつた。中將に著せたらいい色です、若い人には似合ふでせう、などと云つて源氏は歸つて行つた。

面倒な夫人達への訪問の供をして廻つた後、妹の姫君の所へ中將は行つた。

「未だ御寢室にいらつしやいますよ。風をお恐がりになつて今朝はもうお起きになれません。」と乳母が話した。

「此方で宿直をして上げたかつたのだが、宮様の方へ行つたので。お雛様の御殿は眞實に大變だつたでせう。」

「扇の風でも大變なので御座いますから。」

女房達は笑つた。中將は紙と硯を出して貰つた。

「それは餘り良過ぎて私の役には立ち難い。」

と云ひ乍らも、中將は姫君の生母が明石夫人である事を思つて、遠慮をし過ぎる自分を苦笑した。それはうす紫の薄様であつた。

風騒ぎむら雲迷ふ夕にも忘るゝまなく忘れぬ君

といふ歌の書かれた手紙を、穂の亂れた刈萱に中將は附けて居た。女房が云つた。

「交野の少將は紙と同じ色の花を使つた相で御座いますよ。」

「そんな風流が私には出来ないのです。送つて遣る人だつて又そんなものなのですからね。」

中將はかうした女房にも餘り馴れ馴れしくさせない溝を作つて話して居た。中將は尙一通書いてから有馬助を呼んで渡した。美しい童待や物馴れた隨身の男へ更にそれは渡された。若い女房達は使の行く先と手紙の内容とを知りたがつて居た。

姫君が此方に来ると云つて、女房達が俄かに立騒いで、几帳の切れを引直したりして居た。昨日から今朝にかけて見た麗人達と比べて見る氣になつて、中將は妻戸の御簾へ身體を半分入れて、几帳の綻びから覗いた時に、入つて来る姫君を見た。往來する女房がちらちら邪魔になつたが、淡紫の著物に、髪は未だ裾には達せず末の方が態と擡げた様になつて居る細い小さな姿が可憐に見えた。一昨年頃までは稀に顔も見たのであるが、又ずつと其の頃より美しくなつたと思つた。前に見た二人の麗人を櫻と山吹に譬へるなら、是れは藤の花であつた。高い木にかゝつた藤が風に靡く美しさはこれであると思つた。

三條の宮へ行くと、宮は靜かに佛勤めをして居られた。顔だちのよい尼女房の墨染を著たなどは却つて此場所に相應しい氣がした。内大臣も宮を御訪問になつて、灯などを點して緩りと話して居られた。

「姫君にも長く逢ひませんね。眞實に何うした事だらう。」

と宮はお泣きになつた。

「近いうちにお伺ひ致します。自身から物思ひをする人になつて、哀れに衰へて居ります。」

女の子は、何彼につけて親の苦勞の絶えないものです。」

内大臣は未だあの古い過失に就て許し切つて居ない様子なので、宮は望んで居られる事も口へお出しになれなかつた。

「ものにならない娘が一人出来まして困つて居ります。」

「何うしてでせう。娘と云ふ名がある以上おとなしくない譯はないものですが。」

「それがさうは参りません。お笑ひ草にお目にかけたい程です。」

行

幸

346

と大臣は母宮に訴へた。

源氏は玉鬘たまかづらに對して凡おもる好意を盡して居るのであるが、人知れぬ戀を持つ點で、南の女王が想像した通り不幸な結末を生むのでは無いかと見えた。總てのふに形式を重んじる癖があつて少しでも其點の不足した事は我慢のならぬ様に思ふ内大臣の性格であるから、思ひ遣りも無しに塔として麗々しく扱はれる様な事になつては今更醜體で、氣恥しい事であると、其懸念がいさゝか源氏を躊躇させて居た。

この十二月に洛西の大原野の行幸があつた。六條院からも夫人方が車で拜見に行つた。帝は朝の六時に御出門になつて、朱雀大路から五條通りを西へ折れてお進みになつた。道は見物の車で埋まつて居た。親王方、高官達も皆特に馬鞍を整へて、隨身、馬副男うまのへやまの背丈までも撰り揃へて、装束に風流を盡させてあつた。左右大臣、内大臣、納言以下ことごとく供奉した。淺葱あさぎの袍に紅紫の下襲ねを殿上役人以下五位六位までも著て居た。時々雪が少し空から散つて艶あまな趣を添へた。

親王方、高官達も應使ひのたしなみのある人は、野に出てからの用に美しい狩衣を用意して居た。大變な見物の人々であつた。貧弱な出來の車などは群集に輪を壞されて哀れな姿になつて居た。桂川の船橋の邊りが最もよい拜觀場所で、佳い車が其處には多かつた。玉鬘たまかづらの姫君も見物に来て居た。化粧をした朝臣達も澤山見えたが、緋の上著を召された端麗な鳳輦ほうねんの中の御姿に準へられる人は誰もなかつた。

玉鬘たまかづらは人知れず父の大臣に注意を拂つたが、噂通りに華かな貫祿のある盛りの男とは見えたが、絶對な立派さでなくたゞ誰よりも優れた人臣と見えるだけであつた。美男だと云つて若い女房達が大騒をしてゐる中將、少將、殿上役人の誰彼れなどはまして目にも留らなかつた。帝は源氏そつくりなお顔であるが、思ひなしか一層崇高な御美貌に拜された。兵部卿の宮もおいでになつた。右大將は羽振りのよい重臣ではあるが、今日の武官姿の纓を巻いて胡籬やまぐさを負つた形は極めて優美に見えたが、色の黒い髭の多い顔に玉鬘たまかづらは好意が持てなかつた。

源氏は此頃玉鬘たまかづらに宮仕へを勸めて居た。後宮の一人でなく、公式の高等女官になつて陛下へお仕へするのはよい事かも知れぬと、玉鬘も今は思ふ様になつて居た。

大原野で鳳輦が停められ、高等官達は天幕の中で食事をしたり、狩衣などに改めたりして居る頃に、六條院の大臣から酒や菓子の献上品が届いた。源氏は、謹慎日であるので供奉を御辭退したのであつた。藏人の左衛門尉を御使ひとして、木の枝に附けた雉子が一羽源氏へ下された。

其翌日源氏は西の對へ手紙を書いた。

「昨日陛下をお拜みになりましたか。お話しして居た事は何う決めますか。」

ひどい事を、と玉鬘は笑つて居たが、よくも心が見透されたものであると云ふ氣がした。

「昨日は、

うちきらし朝曇りせしみゆきにはさやかに空の光やは見し

何が何で御座いますやら私などには。」

この返事を紫の女王も一所に見た。源氏は宮仕へを玉鬘に勧めた話をした。

「中宮が私の子になつて居られるのだから、同じ家からそれ以上の事が無くて出て行くのをあ

の人は躊躇する事だらうと思ふし、大臣の子として出て行くのも女御が居られるのだから都合だしと煩悶して居る其事も云つて居るのですよ。若い女で資格のある者が陛下を拜見しては御所の勤仕を断念出来る筈がない。」

女王は笑つた。源氏は、

「あなただつて拜見したら陛下のお傍へ上り度くなりますよ。」

と笑ひ乍ら、西の對へ又手紙を書いた。

あかねさす光は空に曇らぬをなどてみゆきに目をきらしけん

「是非決心をなさるやうに。」

源氏は兎も角裳着の式を行はうと思つて、其日の用意を初めさせた。源氏の家で行はれる事は自然に大層な物になつて了ふのであつたから、まして此度の事は是れを機會に内大臣へ眞實の事を知らせようと期して居る式でもあり、極めて華美な仕度になつて行つた。源氏は來春の二月にしようと思つて居た。

今までは藤原の内大臣の娘とも、源氏の娘とも明確にしないで済んで居たが、宮仕へに出す事にすれば春日の神の子を奪ふ事になるし、終ひに知れる筈のものを強ひて當座だけ感情の上から胡麻化すのも自身の不名譽と源氏は考へた。内に流れる親子の血が人爲的の事で絶えるものでも無いから、自然のまゝに自分の寛大さを大臣に知らせようと、裳の紐を結ぶ役を大臣へ依頼する事にした。併し大臣からは、去年の冬から御病氣の大宮が何時何うおなりになるか知れぬ場合だからと、辭退して來た。

中將も夜晝三條の宮へ付き切りであつたし、裳着は延したものと源氏は考へたが、若し宮がお薨れになれば玉鬘は孫として服喪の義務があるのを知らぬ顔で置かしては罪の深い事にもならうから、宮の御病氣とは別問題として裳着を行つて、大臣へ真相を知らせるのも宮の御存命中にしようと源氏は決心した。

源氏はお見舞がてらに三條の宮を訪ねた。宮は愈々光が添つた様な美しさの源氏を御覽になつた事で御病苦も取去られたお氣持になつて、脇息へ倚りかゝりになり乍ら弱々しい調子では

あるがよくお話しになつた。

「中將がひどく御案じ申上げてお話を致すものですから、何んな風でいらつしやるかと心配して居りました。」

「もうあなたにもお眼にかゝれないまゝになつて了ふのかと心細かつたのですが、お見舞下すつたので又少し命も延びる氣がします。一人長く生き残つて居ることも如何かと思ふと、先きを急ぐ氣にもなるのですが、中將がよくして呉れましたね、心配して呉れるのを見ますと又引留められる形にもなります。」

泣いてお話しになるお慄へ聲も身に沁みた。昔の話なども出た序でに源氏は云つた。

「私の伺つて居ります中に、内大臣がお見えになつたら、お眼にかゝれて結構だと思ひます。是非お話しして置き度い事もあるのですが。」

「お上の御用が多いのか、自身の愛が淡いのか、さうさう見舞つては呉れません。お話しになり度いと仰やるのは何んな事でせう。初めの事は何も知りませんが、冷淡な態度をあの子に取

るのを見て居りましてね。」

中將の事であらうと大宮がお思ひになつたので、源氏は笑ひ乍ら、

「今更仕方の無い事として許しておやりになるかと思ひまして、私からも其れとなく希望を述べた事もあるのですが。」

などと云つた後で、眞實ほんじつの問題の説明をした。

「大臣にお話し度いと思ひますのは、かうなのです。大臣の肉身にくみの人を、少し朦朧とした初めの關係から、私の娘かと存じて手許へ引取つたのですが、其時には間違ひである事も知らず従つて詳しくも調べずに、子供の少い私ですから、縁があればこそと思つて、世話を致しかけました。併しさう近づいて見る事もせずに月日が経つたのですが、何うしてお耳に入つたのですか、宮中から御沙汰がありまして、かう仰せられるのです。尙侍たしのかみの職が缺員である事は、其方の女官が御用をするに頼る所が無くて、自然仕事が投遣りになり易い、それで今お勤めして居る故參の典侍二人、其他にも尙侍たしのかみにならうとする人達の多い中にも、資格の十分な人を選ぶ

のが困難で、大抵貴族の娘の聲望のある者、家庭の事に携らないでもいゝ人、と云ふのが昔からの標準になつて居ります。資格は無くとも下の役から勤め上げた年功者が登用される場合はあつても、唯今の典侍に未だそれだけの力が無いとすれば家柄その他の點で他から選ばなければならぬ事になるから、出仕をさせる様にとのお言葉でした。私もお受けしようと云ふ氣になりました。後宮では無しに、宮中の一課をお預りして種々いろいろな事務も見なければならぬ事は女の最高の理想で無いやうに思ふ人はあつても、私はさうとも思つて居りません。仕事は何であつても、其の人格によつて其職が良くも悪くも見えるのだと、私がそんな氣になりました時に、娘の年齢の事を聞きました事から、これは私の子で無くてあの方のだと云ふ事が解つたのです。内大臣へは御出でを願つて此話を申し上げようと存じましたが、あなた様の御病氣の事をお云ひになつてお断りの御返辭を頂いたのです。併しこんな風にお宜しい所を拜見出來たのですから、矢張り計畫通りに祝ひの式をさせ度いと思ひます。内大臣にも其節矢張り御足勞を願ひたいと思ふのですが、あなた様から幾分其事をお匂はしになつたお手紙をお出し下さいま

せんか。」

「それは思ひがけない事で御座いますね。内大臣の所ではさうした名乗りをして来る者は片端またはから拾ふやうにして世話をして居る様ですが。何うしてあなたの所へ引取られようとしたのでせう。」

「さうなつて行く譯がある人なのです。委しい事は大臣の方がよくお解りになる位でせう。中将にも未だ話して御座いません。あなた様も秘密に遊ばして下さい。」

と源氏は注意した。

内大臣の方でも源氏が三條の宮へ御訪問した事を聞いて、宮では太政大臣の御接待にお困りだらう、前駆の人達への饗應なども手不足でお困りにならうと、直ぐに子息や殿上役人達を遣した。

「お菓子や酒もよい様にして上げるがい。私も行く可きだが却つて大層になるだらうから。などと云つて居る時、大宮のお手紙が届いた。」

「六條の大臣が見舞ひに来て下さつたのですが、此方は人が少く、お恥しくもあり失禮でもあり、私が態々お知らせした風で無しに来て下さいませんか。あなたと會つてお話なさり度い事もおありの様です。」

と、書かれてあつた。何であらう、雲井の雁と中将との結婚を許せと云ふのか、御病體の宮が是非にと仰せられ、源氏の大臣が謙遜な言葉で一言其問題に觸れた事を訴へれば自分は拒否の仕様が無い、中将が冷靜で結婚をあせらないのを見て居るのが自分の苦痛なのであるから、いゝ機会があれば一步譲つた形で許さう、と大臣は思つた。他の事であるかも知れないと思つた。一寸反抗的な氣持にも性質となつたのであるが、兎に角に其場になつて判断をする事にして、内大臣は前駆なども簡略にして三條の宮へ行つた。

紅紫の指貫さしかに櫻の色の下襲ねの裾を長く引いた、背の高いどつしりした内大臣は立派であつた。六條の大臣は櫻の色の支那錦の直衣の下に、淡色の小袖を幾つも重ねた寛いだ姿であつた。内大臣の多くの子息達は皆立派になつて居た。藤大納言、東宮大夫などといふ大臣の兄弟

達も居たし、藏人頭、五位の藏人、近衛の中少將など皆一族で、華かな十幾人が、内大臣を取巻いて居た。杯が廻るうちに皆酔が出た。源氏と内大臣とは珍しい會合に昔の事が思出された。世間で別々に立つて居る時には競争心と云ふやうなものが双方の心に芽ぐむのであるが、會つて見れば友情の蘇るのを覚えるばかりであつた。日が暮れた。杯はなほ人々の間に廻つて行つた。

「伺はうとは思ひ乍ら失禮致して居ました。お叱りを受け相でありません。」

「お叱りは私を受けなければならぬと思つて居る事が澤山あります。」

と意味あり氣に源氏が言ふのを、先刻から考へて居た問題であらうと大臣は解して、唯長つて居た。

「昔から公人としても私人としてもあなたと程親しくした人は私にはありません。翅を並べると云ふ様にして將來は國事に携はらうなどと當時は思つたものです。何時の間にか取つた年齢を思つても昔の事が戀しくてなりません、お逢ひ出来る事も減多にしかありませんので。」

と源氏は云つた。

「若い時代を考へて見ますと、よくさうした無禮が出来たものだと思ふ程お親しくさせて頂きまして、何の隔てもあなた様に持つ事はありませんでした。併し長い年月の間にはわれ知らず宜しく無い事も致しました。」

などと大臣も云つた。此話の續きに源氏は玉鬘たまかづらの事を内大臣に告げた。

「何たる事でせう。餘りに嬉しい不思議なお話を承ります。」

大臣は一しきり泣いた。

「ずつと昔、其子の居所が知れなくなつた事で、何の話の時でしたか、餘りに悲しくてあなたにお話した事もあつた様に思ひます。散らかつて居た子供を正直に拾ひ集めて見ますと、又それぞれ愛情が起ります。私は何時もさうして居ながら、あの子が最も戀しく思出されるのでした。」

昔の雨夜の話に、種々いろいろと抽象的に女の品定めをした事も二人の間に思出された。

「かうして居りますと、昔の戀しい事が胸を一杯にして、歸る氣になれないのですよ。」
と、餘り泣かない人である源氏も、酔泣き混りに濕つぽい風を見せた。大宮は葵夫人の事を
思出して居られた。昔の華かさを幾倍したものとも知れぬ源氏の勢ひを御覽になつて、故人が
惜まれてお泣きになつた。

源氏は、中將の事は云ひ出さなかつた。源氏から何とも云はぬ問題に就いて、内大臣も進ん
で口を切る事も出来なかつた。

「今晚お邸までお送り致す可きですが、又別の日に參上して今日のお禮を申し上げます。」

と大臣が云つた。宮の御病氣も宜しい様に拜見するから祝の日には屹度御足勞を煩し度いと
源氏は頼んだ。

何の相談があつたのであらうか、太政大臣は今日も亦前の様に内大臣へ譲る事が何かあつた
のでは無いかと、内大臣の供の公達は臆測をした。

内大臣は源氏から話を聞いた瞬間から姫君が見度くてならなかつた。逢はないで居る事は堪

へられぬ氣もした。併し今直ぐに親らしく振舞ふのも何んなものか、立派な夫人達への遠慮で
新しく夫人に加へる事はしないが、源氏も其儘情人として置く事も世間に憚られるので親の權
利を自分へ譲つたのでは無からうか、自分の娘を源氏の妻に進める事は不名譽である筈が無い、
宮仕へをさせると源氏が言ひ出せば、女御と其母などは不快に思ふであらうが、兎に角源氏の
定める事に従ふ外はあるまい、と大臣は思つた。二月のはじめの頃の事であつた。

十六日からは彼岸になり、其日は吉日でもあり、それ以上の日が其近くには無い事も曆の博
士から報告もあつたから、玉鬘たまがらみの裳着の日を源氏は其の日に決めた。源氏の親切も玉鬘たまがらみには嬉
しかつたが、實父に逢へる日の來た事が何よりも嬉しかつた。源氏は中將へも眞實の事を話し
て聞かせた。不思議な事にも、道理だとも、中將は思つた。そして失戀した雲井の雁よりも美
しく思はれた玉鬘たまがらみの顔を、尙驚きに茫となつた心の中に思ひ浮べて、思はぬ損失を受けた様
にも思つた。

十六日の朝、三條の宮から窃つと使が來て、姫君への贈物の美しい櫛の箱などを賜はつた。

「あなたのお身の上の複雑な事情も私は聞いて居ます事を云つて宜しいでせうか。」

ふたかたに云ひもて行けば玉櫛たまきり笥せきわがみはなれぬかけごなりけり

と老人の慄へた字でお書きになつた手紙を、丁度玉鬘たまがらみの方に居て式の指圖などをして居た源氏も拜見した。

中宮から、白い裳、唐衣、小袖、髪上げの具などを美しく揃へて其他かうした場合の贈物には必ず添へる事になつて居る香の壺には支那の薫香の優れたのを入れてお持たせになつた。六條院の夫人達もそれぞれの好みで姫君の衣裳に女房用の櫛や扇までも多く添へて贈つた。東院の人達も式の事は聞いて居たが、贈物は遠慮して居た。たゞ末摘すゝみ花夫人は、形式的に何でもしないでは居られぬ昔風な性質から、正式に、青鈍色の細長ほそなが、落栗色とか云つて昔の女が珍重した色の袴、紫が白けて見える霞地の小褂こまがらみを玉鬘へ贈つた。御存じになる筈も無い私ですからお恥しいのですが、と大やうに書いた手紙もあつた。源氏は、餘計な事をする人だと顔を赤くした。

内大臣は重々しく振舞ふのが好きであつたから、裳着の腰結び役を引受けたにしても、定刻より早く出掛ける様な人では無い筈なのに、一刻も早く逢ひたい父親の愛が抑へ切れずに、今日は早く出て来た。行届いた祝の設けが六條院に出来て居た。夜の十時に式場へ案内された。特に内大臣の席には華美な設けがしてあつた。普通の裳着の式場などよりも燈火もいさゝか明るくしてあつて、父が廻り合つて見る子の顔の解る程度にさせてあつた。よく見度くは思ひ乍らも、内大臣は唯裳の紐を結んでやる以上の事も出来なかつたが、萬感が胸に迫る様子であつた。源氏は、

「未だ歴史を外部に知らせて無いのですから、普通の作法にお留め下さい。」
と注意した。

「何とも御禮の申上げやうがありません。併し又、今日までお知らせ下さらなかつた恨めしさがそれに添ふのも止むを得ない事とお許し下さい。」

うらめしや沖の玉藻をかづくまで磯隠れける海入の心よ

かう云ふ大臣は悲し相であつた。父の此歌に答へる事は、晴がましくて玉鬘には出来ないのを見て、源氏が代つて云つた。

寄邊なみかゝる渚にうち寄せて海人も尋ねぬ藻屑とぞ見し

「御無理なお恨みです。」

内大臣は、道理ですと苦笑する外は無かつた。裳着の式は終つた。大臣が饗應の席へ急に歸つて來ないので疑問を起して居た來賓もあつた。内大臣の子息の頭の中將と辨の少將だけはもう真相を聞いて居た。知らずに戀をした事を思ふと、恥ぢもしたし、精神的戀愛に止つた事を幸せであつたと思つた。

「當分此事は慎重にして置き度いと思ひます。何時と無く事實として人が信じる様になるのがいゝでせう。」

と源氏は云つて居た。引手物などにも定つた式があるのであるが、それ以上に派手な物が出された。大宮の御病氣に御遠慮して華かな音楽の遊びは無かつた。

兵部卿の宮からは、もう成年式も済んだ以上、何も結婚を延す理由は無からうと、熱心に源氏の同意を求められたが、

「一度御辭退申上げた後で又仰せがありますから、兎も角も尙侍を勤めさせる事に致します。其上で又結婚の事は考へ度いと思ひます。」

と源氏は挨拶をした。

仄かに見た玉鬘の顔をもつとはつきり見度い、容貌の悪い娘であればあれ程源氏も大事にしては呉れまい、などと思つて未だ見なかつた日よりも一層父の大臣は戀しがつて居た。夢占ひの言葉が事實に合つた事も思はれるのであつた。最愛の姫である女御にだけは玉鬘の事を委しく話した。

世間では何時となく評判する様になつた。例の蓮葉な大臣の令嬢が聞いて、女御の居間に頭の中將や少將などの來て居る時に出て來て云つた。

「殿様は又お嬢様を發見なすつたのですつてね。其人もいゝお母様から生れたのでは無いので

すつてね。」

女御は片腹痛く思つて何とも云はない。

「何を云ふのです。誰から聞いてそんな事を云ふのですか。」

と中將が云つた。

「私は皆知つて居ます。其人は尙侍なかしつかみになるのです。私が女御様の所へ來てゐるのはそんな風に引立てゝ頂けるかと思つてゞすよ。普通の女房もしない用事も私はして働いて居ますのに。」

と令嬢は女御を恨んだ。

「腹を立てゝあなたが天の岩戸の中へ入つて了へばそれが最もいゝのですよ。」

中將は立つて行つた。令嬢は泣いて居た。令嬢は小忠實こまめに、下の童女さへし兼ねるやうな用にも走り歩いて、一生懸命に勸すすめては、尙侍なかしつかみに推薦して下さいと、女御を責めた。何んな氣持ちでそればかりを望むのであらうかと、女御は呆れて居た。此の話を内大臣は聞いて面白相に笑つて居たが、女御の所へ來た時、令嬢の近江の君を呼んだ。何故早く尙侍なかしつかみになり度いといふ

事を自分に云はなかつたのかと、大臣は眞面目な顔でからかつたりした。

藤

袴

尙侍しやうじになつて御所へお勤めする様にと、源氏はもとより實父の内大臣の方からも勤めに來る事で、玉鬘たまかづらは煩悶をして居た。それがいゝ事なのであらうか、養父の筈である源氏さへも絶對の信頼は出來ぬ男性の好色癖をやゝもすれば見せて自分に臨むのであるから、お仕へする君との間に情人關係が出來た時は、中宮も女御も不快に思はれるに違ひない、そして自分は兩家の何方にも薄弱な根柢しか無い娘であるから、中宮や女御に於ける後援は期して得られるもので無い上に、自分の幸運げな外見を羨んで何か悪口を云ふ機會が無いかと窺つて居る人を多く持つて居ては其時の苦しさが想像されると、若いと云つてももう少女で無い玉鬘たまかづらは苦しんで居た。さうかと云つて、今の儘の境遇を變へず居るのも厭な事では無いが、源氏の戀を離れて世間の臆測の眞實で無かつた事を人に知らせる機會を失ふのも苦しかつた。

源氏は最早道德的に憚らねばならぬ事から解放された様に、戯れかゝる事も多くなつて、玉鬘たまかづらを愛鬱あいうつにした。自分の心持を匂はしてだけでも云へる母といふものを玉鬘たまかづらは持つて居なかつた。東の夫人にせよ、南の夫人にせよ、母らしく交つては呉れるが、何うして内密な相談などが打ち明けられようと、夕方の空の身に沁む色を、縁に近い座敷から眺め乍ら物思ひをして居た。祖母の宮の爲めの淡鈍色たんどんいろの喪服を玉鬘たまかづらは著て居た。

源宰相の中將が、これも鈍色の今少し濃めな直衣を着て、冠を卷纒まきりにした平生よりも艶えんな姿で訪ねて來た。最初の頃から好意を表して呉れる人で玉鬘たまかづらも親しく取扱つた習慣から、今になつても兄弟では無いと云ふ様な態度も宜しく無いと思ふので、御簾に几帳を添へただけの隔てで話も取次ぎ無しでした。中將は宮中からの仰せを源氏に代つて傳へに來たのであつた。

野分の朝覗いた顔の美しさの忘れられないのを、其人は姉ではないかと、戀しくなる心を責めて居た中將であつたが、さうした障りの除かれた今は、戀人として此人を考へて居た。帝は尙侍しやうじの職をお勤めさせになる事で御満足遊ばすまい、此世で第一の美貌の帝との間に戀愛の關係は必ず出來るであらうと思ふと、中將は胸を何かで抑へ付けられるやうな氣もした。

「人に聞かせぬやうにと父が申す事をお話し致し度いのですが。」

中將の此言葉を聞いて、女房達は几帳の後の方などへ皆遠慮して行つた。源氏の云つたので

も無い言葉を、眞實らしくいろいろと中將は傳へた。帝が尙待にお召しになる御眞意は別にあらうから、綺麗に身を守らうとするには始終其心得がなくてはならないと云ふ様な話であつた。玉鬘は唯吐息をつくばかりであつた。其美しさが中將の心を亂した。

「私達の喪服は此月で脱ぐ筈ですが、曆ではいゝ日が無いので延びる事になりますね。十三日に加茂の河原へ除服の御祓にあなたが行く様に父は決めて居る様です。私も御一所に参らうと思つてゐます。」

「御一所では目立ちませう。誰にも餘り知られない様にして行く方がいゝと思ひますが。」

内大臣の娘として大宮の喪に服した事などは世間へ知らせぬ様にせねばならぬと考へる所に此人の聰明さ、源氏への思ひ遣りが現れて居た。

「一人の方を祖母に持つたあなたと私かと思ふと不思議な氣がします。喪服をお著になる事が無かつたら、眞實の事を私は知らず終ひになつたのかも知れません。」

「兎に角喪服を著て居ります氣持は身に沁むものですね。」

此時にと思つたのか、手に持つて居た蘭の花を御簾の下から中へ入れて、此花も今の私達に相應しい花ですから、と玉鬘が受取るまで放さずに居るので、止むを得ず手を出して受取らうとする袖を中將は引いた。

おなじ野の露にやつるゝ藤袴哀れはかけよかごとばかりも

「道のはてなる（東路の道のはてなる常陸帯のかごとばかりも逢はんとぞ思ふ）」

かう云ひかけられて、當惑した玉鬘は、そつと少しづつ身を後方へ引いて行つた。

たづぬるに遙けき野邊の露ならばうす紫やかごとならまし

「従妹と云ふ事は事實ですからいゝでせう。其他の事は何も。」

中將は笑つて、

「其事實の外に考へて下さらなければならぬ事もお解りになる筈ですが。此感情は抑へられるもので無いのですからお察し下さい。頭の中將の近頃の様子を御存じですか。あの頃は明かに第三者だと思つて居た私が、こんなに戀の苦しみを味ふのも、冷淡にした時の報いです。今

ではあの人が冷静になつて、しかも繋がる縁のある事に満足して居るのですから、羨しくてありません。」

と云つた。自分を信じて下さらないのか、とも云つた。少し気分が悪くなつたからと、玉鬘は奥へ入つた。歎息をし乍ら中將は其處を去つた。餘計な告白をしたとも思つた。此人以上に身に沁みて戀しい紫の女王と、せめて是れ程の接觸が許されて仄かな聲でも聞けたらとも思ひ乍ら、中將は南の町へ來た。源氏は直ぐ出て來たので返事を報告した。

「御所へ上るのを、辛うじて濫々承諾した形なのだから困る。兵部卿の情熱のこもつた手紙などで其方へ心が惹かれるのかと思ふと氣の毒にもなるが、大原野の行幸に陛下を拜見してお美しいと思つた様子だつたから。」

などと源氏は云つた。

中將は源氏自身の胸中の祕事も探り度くなつた。

「今日迄實父に隠してお手許へお置きになつた事で、種々な付度を世間ではして居ります。内

大臣も、そんな意味を含んだ事を、右大將から彼方への申込に對して答へた相ですが。」

「其れは思ひ遣りのあり過ぎる迷惑な話だね。」

「此方には立派な夫人方がおいでになつて、新しく其數へお入れになれない爲め、世間體だけ官職にお就かせする事にして、矢張り何時までも愛人でお置きになれる様なお計ひは、賢明な處置だと云つて、大臣が喜ばれた事を確かな人から私は聞いて居ります。」

「困つた解釋をされるものだね。直きに事實が萬事を明かにしようが、それにしてもひどい想像だね。」

源氏は笑つた。未だ疑ひは十分に残つて居ると、中將は思つて居た。源氏も心の中で、かう人の噂する筋書通りの過つた道は踏むまいと自ら警めた。何うして大臣に想像されたのであらう、と薄氣味悪く思ひました。

玉鬘は除服したが、翌月の九月は女の宮中へ入る事を忌む月なので、十月になつてから出仕する事に源氏は決めた。帝は待遠しく思召して居た。求婚者は皆尙侍に決定した事を聞いて殘

念がつた。それ迄に縁組みを決めて、御所入りを阻止しようとしたが空しかった。しないでもよい告白をした心苦しさを紛らす爲めに、源中將は、尙侍の出仕に就ての用事などに奔走して居た。

月明の晩、頭の中將はそつと父の大臣の使として玉鬘を訪ねた。未だ親娘としての公然の往來は憚つて、そつと手紙を送つてそつと返事を受けるやうにして居たのであつた。今夜は、中將は南の縁側に座を設けて招ぜられた。こんな事は始めてあつた。玉鬘は自身で出て話す事は未だ恥しくて、返辭だけ宰相の君に取次がせた。

「私が使に選ばれて來ましたのは、直接にお話を申上げる様にと云ふ父の考へだつたと思ひますので。」

と、中將はもう一段親しくし度い様子を見せた。

「御尤もでは御座いますが、身體の具合が何と云ふ事無しに勝れず、起上るのも大儀で御座いますので、かうさせて頂きます。」

「お寢みになつていらつしやる几帳の前へ通して頂けませんか。併し強ひてお願ひ致すのも失禮ですから。」

と、頭の中將は、大臣の言葉を靜かに傳へた。此際何か不足なものでもあるなら云つて貰ひ度い、世間に遠慮するので思ふ事も直接に話す事も出來ず残念に思つて居る、といふのであつた。

頭の中將は、自分が過去に申上げた事に就てはそれ程訂正しないでもいふと思ふ、何ちらにもせよ愛して頂けばいふのである、今夜の待遇などから恨めしい氣にもなる、とも云つた。

「餘り俄かな變り方も、人聞きが遠慮されまして、憚られますので。」

と玉鬘は宰相の君に云はせた。

月が明るく中天に上つて居て、艶な深夜に品のいふ中將の歸つて行く姿は華かな見ものであつた。

大將は此中將の居る右近衛の方の長官であつたから、始終此人を呼んで玉鬘との縁組みに就

いて相談して居た。内大臣へも希望を取次いで貰つて居たのである。人物も立派であつたし、將來の大臣として活躍する素地のある人であつたから、娘の爲めに悪い配偶者では無いと大臣は認めて居たが、總てを源氏に一任して居るからと返辭をさせて居た。此大將は東宮の母君である女御とは兄弟であり、源氏と内大臣に續いて勢力があつた。三十二歳で、夫人は紫の女王の姉君、式部卿の宮の長女である。三つ四つ上ではあつたが、何うした譯かお婆様と呼んで其夫人を愛しては居なかつた。その人と別れて別の結婚を願つて居た。

さうした夫人の關係があるので、玉鬘と大將との縁談には、源氏は賛成しなかつた。大將の家庭の爲めにも、玉鬘のためにも、煩はしい關係を避けさせたかつたのである。大將は、内大臣は此縁談に絶対に反対と云ふ譯では無い事、玉鬘自身は宮仕へに氣が進んで居ない事を聞いて居たので、

「源氏の大臣だけが反対といふ譯ではないか。實父がいゝと思はれる通りになすつたらいゝのに。」

と、仲介者の女房の辨を責めて居た。

九月になつた。初霜が庭をほの白くした朝、又例の様に諸方から依頼された手紙を、女房達は恥ぢるやうにし乍ら玉鬘の居間に持つて來た。自分では讀まずに、玉鬘は女房に開けさせて、讀まして聞いて居た。

「戀する人の頼みとする八月も何うやら過ぎて了ひ相な空を眺めても私は煩悶して居ます。」

と、右大將のは、十月玉鬘の御所へ出るのを知つて居る様子であつた。

兵部卿の宮の手紙は、

朝日さす光を見ても玉笹の葉分の霜は消えずもあらなん

「私の戀する心を認めて居て下すつたら、せめてそれだけを慰めにし度いと思つて居ます。」

といふのであつた。縮んだ様になつた下折れ笹に霜の降つたのに付けてあつた。式部卿の宮の左兵衛督は南の夫人の弟である。六條院へは始終來て居る人なので、玉鬘の宮中入りの事もよく知つて居て、相當に煩悶して居るのが文意に現れて居た。

選んだ紙の色、書きやう、焚きしめた薫香などもそれぞれの特色があつた。玉鬘たまかづらが御所へ出るやうになれば、かうした事も無くなるのを女房達は惜しがつて居た。

宮への御返事だけを、何ういふ氣持からか、短くはあつたが玉鬘たまかづらは書いた。

心もて日かけに向ふ葵だに朝置く露をおのれやは消つ

仄かな字で書かれた此歌に、同情の心の言つてあるのを御覽になつて、宮は非常に嬉しくお思ひになつた。

真木柱

「帝のお耳に入つて、御不快に思召す様な事があつても恐れ多い。當分世間へ知らせない様にした。」

と源氏から注意はあつても、右大將は戀の勝利者である誇りを何時までも蔭の事にはして置かれない風であつた。時日が経つても新しい夫人には打融けた所が見出せないで、大將は氣を減入らせてばかり居る玉鬘を恨めしく思ひ乍らも、此人と夫婦になれた前生の因縁が非常に有難かつた。豫想したにも過ぎた佳麗な人を見ては、自分が得られなかつた場合には此秀れた人は他人の妻になつて居るのであると、こんな想像をする瞬間にも胸が轟いた。石山寺の觀世音菩薩も、女房の辨も並べて拜み度い程に大將は感激して居たが、玉鬘からは、最初の夜の彼れを導き入れた女として憎まれて居て、辨は新夫人の居間に出て行く事も出来なかつた。

佛の御心にも其の祈願は取上げずに居られまいと思はれた風流男達の戀には効験が無くて、荒けづりな大將に石山觀音の靈験が現れた結果になつたのである。源氏も此問題を快心の事とは思はれなかつたが、最早成立した事でもあり、當人も實父も許容した婚なのであるから、新

婦の家としてする儀式を華麗に行つた。早く新夫人を自邸に引取り度いと大將は思つて居たが其處には嬉しく思つて迎へぬ筈の第一夫人も居るのが、玉鬘の爲めに氣の毒であると云ふ事を理由にして、源氏は留めて居た。

實父の大臣は、此結婚が却つてあなたの爲めに幸福だと思ふ、といふ手紙を玉鬘へ送つた。それは眞理であつた。相手が帝でおありになつても、第一の寵は無く、唯御愛人であるに留められてあやふやな後宮の地位を與へられて居るやうな事は、女として幸福な事ではない。三日の夜の式に源氏が右大將と應酬した歌の事などを聞いた時、内大臣は源氏の好意を非常に喜んだ。新しい事實としてこの結婚は世間の話題になり出した。帝の御耳にも入つた。残念だが、後宮へ入る事とは違ふ尙侍の職は辭めるに及ぶまい、さう云ふ仰せが源氏へ下された。

十月になつた。神事が多くて、内侍所が繁忙を極める時節で、内侍以下の女官なども尙侍の意見を自邸へ聞きに來たりして、人の出入も多くなつた所へ、大將は晝も歸らずに暮して居たりするので、尙侍は困つて居た。失戀の悲しみをした人々の中でも、兵部卿の宮などは殊に残

念がられた一人で、左兵衛督は姉の大將夫人の事も一所にして世間體を悪く思つたが恨みも云はず沈黙して居た。以前眞面目で通つて居た大將は、生れ變つた様な戀の奴の役に満足して、風流男らしく宵曉に新夫人の六條院へ出入りした。

自發的に出來た結果で無い事は第三者にも解る事であるが、源氏が何う思つて居るかと思ふと、玉鬘には遣る瀬なく苦しかつた。兵部卿の宮のお志が最も深く思はれた事も思出すと、恥しく口惜しくて、大將を愛する事が出來ない。

大將の居ない晝頃に、源氏は玉鬘の所へ行つて見た。玉鬘は萎れてばかり居たのであつたが、少し起き上つて几帳に隠れる様にして坐つた。前とは違つて父の威嚴と云ふやうなものを少し見せた源氏の高雅な姿にも、平凡な大將の姿ばかり見て居る此頃の玉鬘には、意外な運命に従つて居る自分が恥しくて涙が零れた。そして脇息に倚りかゝつて、几帳の外の源氏の方を覗く様にながら返辭を云つて居た。少し瘦せて可憐さの添つた顔を見乍ら、源氏は、これを他人に譲るとは自分乍ら餘りに善人過ぎたと残念に思つた。

下り立ちて汲みは見れども渡り川人のせとはた契らざりしを
「意外な事になりましたね。」

涙を吞んで源氏が言つた。玉鬘は顔を隠して、

みつせ川渡らぬさきにかでなほ涙のみをの泡と消えなん
と答へた。源氏は微笑を見せた。

「悪い場所で消えようと云ふのですね。然し三途の川は何うしても渡らなければならぬ相ですから、其時は手の先だけを私に引かせて下さいませるか。」

形式的にだけでもあなたを參内はさせようと思つて居る、單なる尙侍である事は最初の自分の精神とは離れたものであるが、二條の大臣は却つて満足されて居るからとも源氏は云つた。たゞ涙にむせぶ玉鬘が哀れで、戀を囁く事も出來なかつた。たゞ、今後の大將と其一家に對する態度などを教へた。

大將には、御所へ尙侍を出す事は更に不安であつたが、それを機會に御所から自邸へ尙侍を

退出させようと考へ、短時日の間だけを宮廷へ出る事を許すやうになつた。かう云ふ風に婿として通ふ様式は馴れない事で大將には苦しい事であつた。自邸を修理して一日も早く玉鬘を迎へたかつた。今日までは邸の中も荒れるに任せてあつたのである。夫人の悲しみも知らず、愛して居た子供等も大將の眼中にはもう無かつた。好色な風流男といふものは、唯一人だけを愛するのでなしに、誰の爲め彼れの爲めと考へて思遣りのある處置を採るものなのであるが、生一本な人のかうした所作は夫人には堪るまいと思はれた。

夫人は式部卿の宮の御長女であつた。美人でもあつた。併しひどい物怪が附いて、この何年か尋常人の様でなかつた。狂つて居る時が多かつたが、猶唯一の妻として居た大將に、新しい夫人が出来たのである。そして世間も疑つて居た源氏との關係も無く清い處女であつた點に、大將の愛は強く惹かれて了つた。式部卿の宮は、此事情を聞かれて、夫人を引取らうといふ氣におなりになり、御自邸の東の對を掃除させておいでになつた。

親の家でも、良人の愛を失つた女になつて歸つて行く事は、夫人には決心の出来兼ねる事であつた。

あつた。

「別れて了ふやうな事は考へないで貰ひ度い。子供もあるのだから。女の人には嫉妬といふ困つたものがあつて、私を恨んでばかり居るが、暫く靜かに見て居て呉れたなら、私のあなたを思ふ心が何んなに深いものか理解出来る日があるだらうと思ふ。宮様は實際別れさせて了はうと思ひになるのかしら。暫く懲らしめてやらうといふお考へであらうか。」

笑ひながら云ふ大將の様子に、利己的な所が十分に見えた。普通の精神状態にあつた時で、夫人はいぢらしく泣いて居た。

「私が御侮辱を受けますのは道理と思ひますが、お言葉の中に宮様の事の混るのを聞きますと、私の様な者の父であるばかりにと思はれてお氣の毒でなりません。あなたのお噂を聞くのは近頃始まつた事でも御座いませんから、悲しみは致しません。」

と横を向く顔は可憐であつた。小柄な人で持病の爲めに瘦せ衰へ、薄くなつた髪もよく梳かれても居なかつた。

「あなたの冷酷な事がいゝ事か悪い事か私はもう考へません。宮様にもお氣の毒で、私は邸へ歸り度くないと思つて居ります。六條の大臣の奥様は私の爲めに他人では御座いません。餘所で育つた其人が大人になつて、養女の爲めに姉の私の良人を塔に取つたりする事で宮様などは恨んで居られるのですが、私はそんな事も思ひません。たゞ彼方でしていらつしやる事を眺めて居りますだけ。」

「こんなにあなたはよく筋道の立つ話が出来るのだがね。六條院の女王は此問題には關係はして居られないのだよ。それなのに恨んだりして居る事がお耳に入つては濟まない。」

終日夫人の傍に居て、大將は語つて居た。日が暮れると、大將の心はもう静め様も無く浮立つて、一刻も早く自邸を出たいとばかり願つて居たが、外は大降りな雪であつた。こんな雪の降る時に家を出て行くのも人目に不人情に映らう、見境ひも無しの嫉妬でも妻がして呉れたら自分も又家を出る機会を作れるのであるが、かう静かにして居られては氣の毒になるばかりである、煩悶し乍ら、大將は格子も下ろさせずに縁側に近く庭を眺めて居た。

「生憎雪がだんだん深くなる様ですよ。時間ももう遅いでせう。」

あきらめ切つて居る夫人は外出を促した。

「こんな夜に何うして。」

と大將は云つたのであるが、又、

「當分は、此方の心持を知らずに、傍に居る女房などからいろいろ疑られたりもするだらうし、又兩方の大臣が此方の態度を監視なすつてもいらつしやるのだから、間を置かずに行く必要がある。あなたは静かに氣長に私を見て居て下さい。邸へ伴れて來れば、それからは其人だけを偏愛する様に見える事も無しに濟みませう。今日などはあなたばかりが好きになる。」

と、こんな事も云つた。

「家においてになつてもお心が外へ行つて居つては私も苦しい御座います。餘所にいらつしやつても此方の事を思遣つて居てさへ下すつたら。」

夫人は優しく云つて、火入れを持つて來させて良人の外出の衣服に香を焚きしめさせて居

た。眼は泣き腫らされて居た。長い年月の間二人だけで愛し合つて來たのであると思ふと、新しい妻に傾倒して了つた自分の輕薄さを反省し乍らも、行つて逢はうとする新しい妻を思ふ興奮は何うする事も出来ない。心にも無い歎息をし乍ら著更へをして、猶小さい火入れを袖の中へ入れて香を焚きしめて居た。

「一寸雪も止んだやうだ。もう遅からう。」

侍所に集つて居る人達が、さすがに眞正面から促すので無しに、主人の注意を引かうとする様な聲が聞えた。妾の様になつて居る中將の君や木工の君などは、悲しい事になつて了ひました、などと歎き乍ら皆床に入つて居た。夫人は靜かに可憐な風に身を横へたと見る中に、起上つて、大きな衣服のあぶり籠の下に置かれてあつた火入れを手に掴んで良人の後に寄つて投げかけた。細かな灰が目にも鼻にも入つて大將は何も解らなくなつて居た。やがて拂ひ捨てたが、部屋中に朦々と灰が立つたから大將は衣服も脱いで了つた。何時もの物怪が夫人にさせた事なので、夫人が氣の毒であると、女房等も見て居た。妻に對する憎惡の念ばかりが大將の心

には起つた。夜中ではあつたが、僧を招んで加持をさせた。夫人はあさましい叫び聲を上げて居た。夜通し僧から打たれたり引づられたりして居た後夫人が少し眠つたのを見て、源氏は其間に玉鬘へ手紙を書いた。

「病人が出來まして、折から降る雪もひどく、其方へ行くのを止むなく斷念する事にしました。外界の雪の爲めでも無く、私の身の中は凍つて了ふ程寂しく思はれました。

心さへそらに亂れし雪もよに獨り冴えつる片敷の袖

堪へ難い事です。」

白い薄様に重苦しい字で書かれてあつた。無關心な風に見ただけで、玉鬘からは返事は無かつた。大將は自宅で憂鬱な一日を暮した。夫人は猶今日も苦しんで居たから、修法などを始めさせた。大將自身の心の中でも、此處暫くは夫人に發作の無いやうにと願つて居た。

大將は日が暮れると直ぐに出掛ける用意にかゝつた。行届いた妻らしい世話も十分に出來ない夫人であつたから、綺麗な直衣などが直ぐに間に合はないで見苦しかった。昨夜のは焼け通

つて焦げ臭い匂ひがした。小袖類にも其匂が移つて居たから、一度著た衣服を脱いで、風呂を立てさせた。木工の君は主人の爲めに薰物をしながら、私達までもお氣の毒でありません、なと袖で口を掩うて云つて居る其眼は、大將を十分に咎めて居た。何うしてこんな女と情人關係を結んだかと大將は思つた。

「あゝした醜態が噂になれば、彼方の人も私を悪く思ふやうになつて、何つちつかずの不幸な私になることだらうよ。」

歎息をし乍ら大將は出て行つた。中一夜置いたゞけで美しさが又加はつた様な玉鬘であつたから、大將の愛は一層此一人に集る氣がして、自邸へ歸る事が出来ず其儘つと玉鬘の方に居た。大騒ぎをして修法などをして夫人の病氣は相變らず起つて、大聲を上げて人を罵るやうな事のある報らせを得て居る大將は、自分の爲めにも不名譽な事が必ず近くに居れば起り相な豫想がされて、怖しくて近づかないのである。邸へ歸る時にも、外の對に離れて居て子供等と呼寄せて見るだけを樂みにして居た。女の子が一人あつて、十二三になつて居た。其次に男

の子が二人あつた。近年はもう夫婦の間も隔り勝ちに暮しては居たが、唯一人の夫人として尊重する事は昔に變らないのであつたが、今はもう最後の時が來たのだと夫人も思ふし、女房達も悲しむより外は無かつた。父宮からは、

「そんな冷酷な扱ひを受けても未だ辛抱強くあなたはして居るのですか。」

と云ふお言葉が傳へられて、俄かに迎へが出された。夫人はやつと常態になつて居た。今になつてまだ父宮のお言葉に従はず此處に居て、全く良人から捨てられて了ふ日を待つ事は、現在以上の恥にならうと思つて、實家へ行く事にした。夫人の弟の公子達は、左兵衛督は高官であるから人目を惹くのを遠慮して、其他の中將、侍従、民部大輔などが三つ程の車を用意して夫人を迎へに來た。女房達は泣き合つた。

「これまでの様でないかゝり人におなりになるのだから、お狭い處に大勢がお付きして居る事は出来ません。」

と幾人かゞ供をして、あとは自分達の家へ別れ別れに下る事になつた。夫人の道具の運ばれ